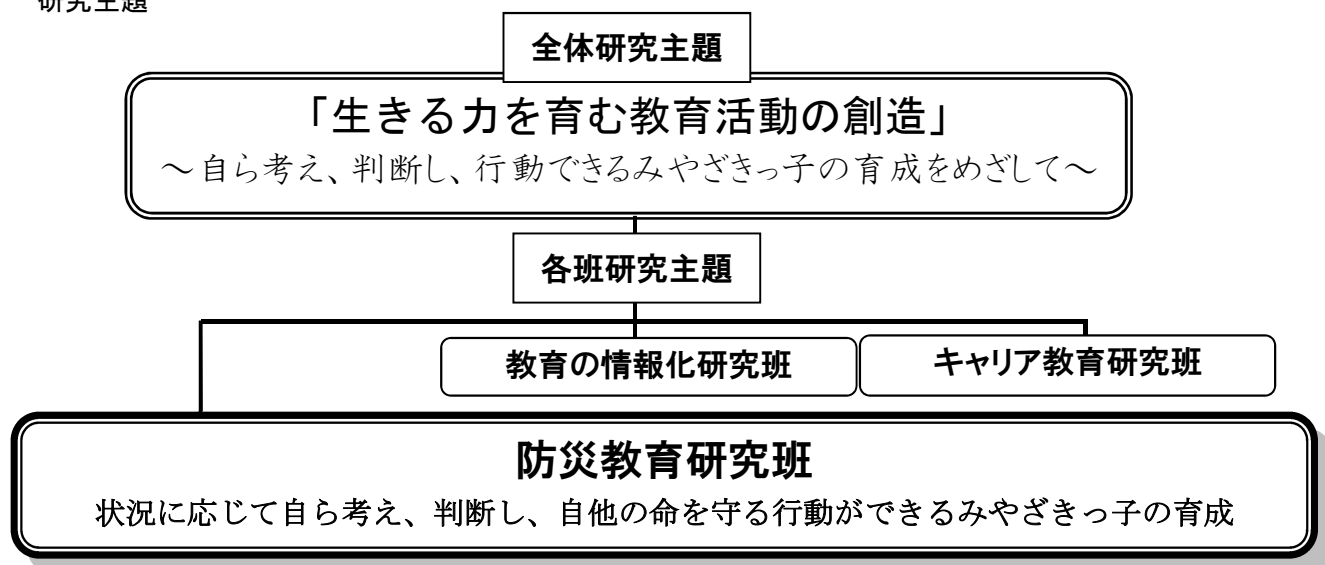


I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められている。さらに、教科等を横断して改善すべき事項として、情報教育、キャリア教育、安全教育などがあげられている。

また本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着を持つ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定され、その中で、確かな学力やキャリア教育等の充実が求められている。また、東日本大震災の教訓や南海トラフを震源とする巨大地震が発生することが予想されており、昨年度より市内の小中学校に新たに防災主任を置いた。さらに、本年度市内すべての小中学校にコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進に努めているところである。

これらの社会や本市の状況を踏まえ、本研究班においては、昨年度より、状況に応じて自ら考え、判断し、命を守る行動ができるみやぎっ子の育成についての究明を進めてきた。本来、防災とは、風水害、火災などの全ての災害を防ぐという意味であるが、2011年に東日本大震災が起きたことと南海トラフを震源とする地震とそれに伴う津波がいつ本市で発生してもおかしくない状況にあることから、地震・津波に特化した防災教育について研究してきた。昨年度は、防災学習と避難訓練を関連させることで、児童生徒の防災への意識が高まり、より安全な避難をすることができるようになるなど、一定の成果を得ることができた。しかし、防災へ理解の深まりがあまり見られなかったため、特別活動だけでなく、他領域でも防災教育を充実させるにはどうしたらよいかという課題が残った。これらの成果と課題を踏まえて、津波が起きるメカニズムと地震が起こった際の避難の方法や津波から避難する方法を学ぶ防災学習と、より安全に地震・津波から避難するための避難訓練を計画、実践することで、状況に応じて自ら考え、判断し、自他の命を守る行動ができるみやぎっ子を育成できると考えた。

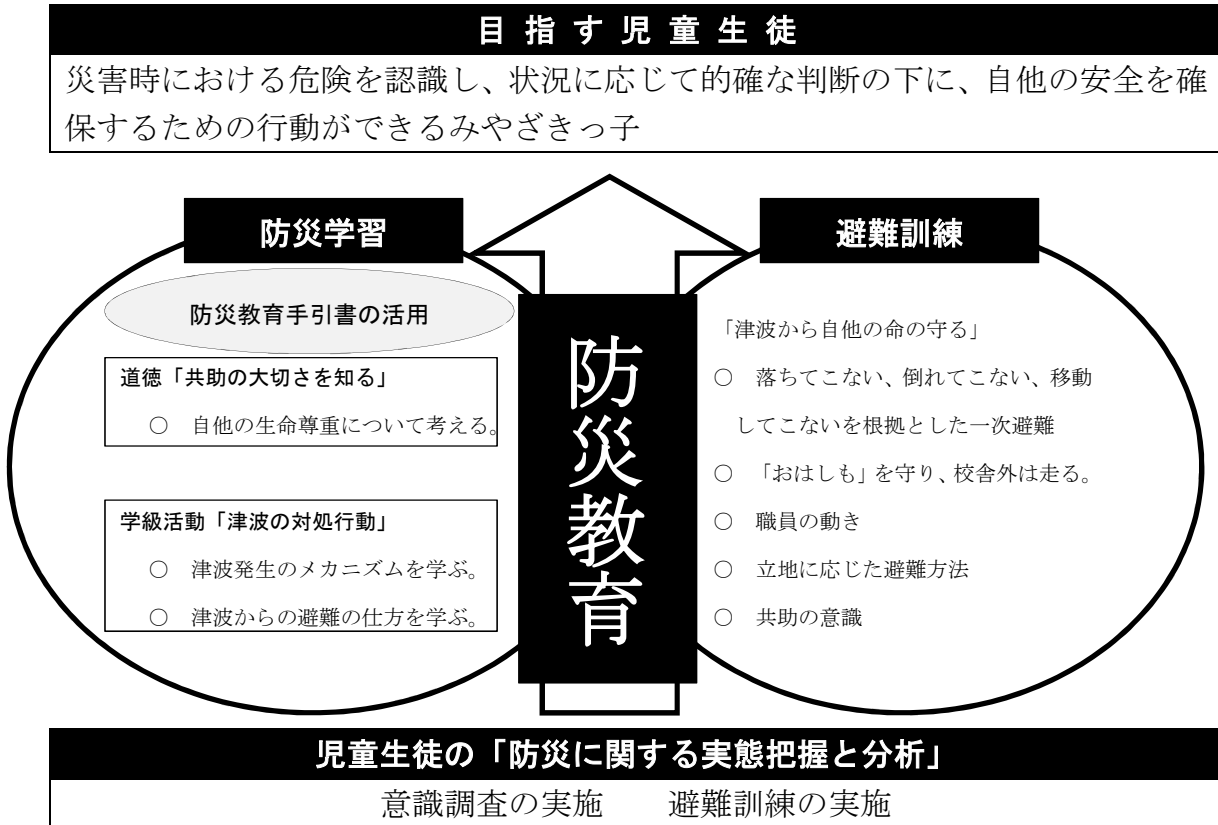
III 研究目標

災害時における危険を認識し、状況に応じた的確な判断の下に、自他の安全を確保するための行動ができる児童生徒の育成の在り方を究明する。

IV 研究仮説

津波に関する基礎的・基本的事項を理解させる指導や生命尊重に関わる授業を行い、避難の方法を見直せば、災害時における危険を認識し、状況に応じた的確な判断の下に、自他の安全を確保するための行動ができる児童生徒の育成が図られるだろう。

V 研究構想



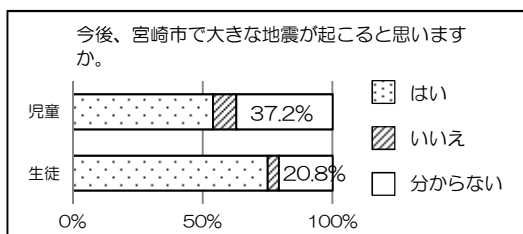
【図1 研究構想】

VI 研究の実際

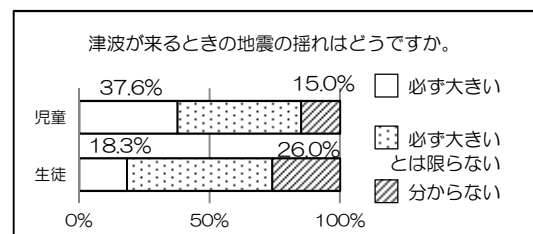
1 研究内容

(1) 意識調査実施・結果分析

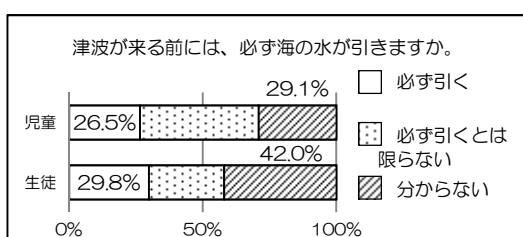
平成25年7月に研究員の勤務する小学校3、4、5年生(67名)と中学2、3年生(108名)を対象に地震・津波に関する意識調査を行った。【図2】から【図7】はその結果である。



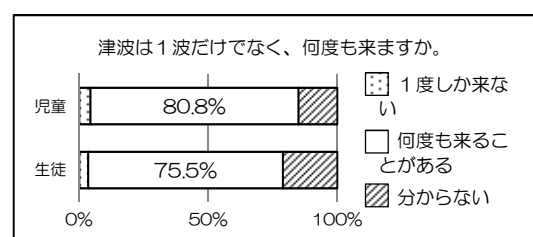
【図2】



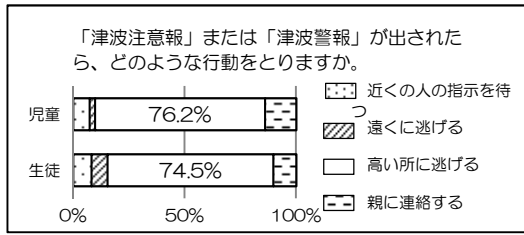
【図3】



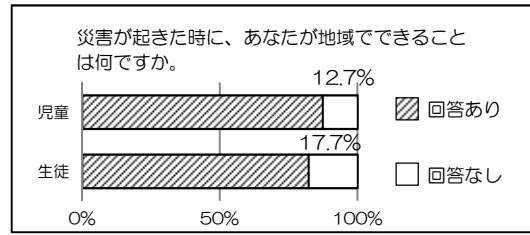
【図4】



【図5】



【図 6】



【図 7】

【図 2】より、宮崎市で大きな地震が起こる可能性について「思わない」「分からない」と答えた児童が 37%、生徒が 21%いた。新聞等で、宮崎市でも大きな地震が起こると報じられているにも関わらず、児童生徒の認識や危機意識が低いことが分かる。【図 3】より、津波が来る前の地震の大きさについて、「必ず大きい」、「分からない」と答えた児童が 53%、生徒が 44%を占めていた。【図 4】より、津波が来る前には、「必ず水が引く」「分からない」と答えていた児童が 56%、生徒が 72%いた。これらの結果から、児童生徒がまだ津波に関する正しい知識を十分に身に付けていないことが分かった。しかし、【図 5】より、「津波が 1 波だけでなく、何度も来ますか」という問いに対して、児童 81%、生徒 76%が正しい知識を身に付けていることが分かった。また、【図 6】より、津波注意報や津波警報が出されたときの対処行動については、75%の児童生徒が「高いところへ逃げる」と答えた。しかし、人の指示や判断を待つとした児童生徒も 20%おり、まだ自分で考えて行動できない児童生徒がいることが分かる。さらに、【図 7】より、災害時に自分にできることについて、回答していない児童は 13%、生徒は 18%おり、共助の意識が十分でないことが分かる。だから、津波に関する正しい知識や共助の大切さを知る授業やそれらを生かした避難訓練が必要である。

(2) 避難訓練の分析（平成 25 年 9 月 13 日：研究員の所属する小学校）

避難訓練を実施し、避難の仕方や流れを参観し、避難訓練の分析を行った。

ア 概要

- ・ 縦割り清掃班による清掃時間中の実施。
- ・ 震度 7 の地震発生を想定。揺れがおさまった後に緊急速報で津波警報発令。
- ・ 児童は、各学級に集合し整列。人数確認後、決められた校舎 3 階の各教室に避難。

イ 児童の実態（○よい点、●改善すべき点）

- 清掃中の突然の訓練開始であったが、騒然とする姿はなかった。
- 「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・戻らない）を守りながらの避難は、約 8 割の児童が実践できている。
- 震度 7 の揺れを意識した行動はとれておらず、地震の効果音が行れる中、一次避難場所に移動する姿が見られた。
- 各教室への避難指示が出されても、避難行動に移れない低学年児童が多く見られた。
- 助け合って避難する児童が見られないことから、共助の意識は低いと言える。

ウ 職員の実態（○よい点、●改善すべき点）

- トイレや空き教室など児童が残っていないか、職員の見回りが計画的に行われていた。
- 大規模校での避難訓練だったが、全児童を確実に避難誘導できていた。
- 大きな揺れに対応していない避難や誘導を行う職員が見られた。

2 授業づくり

ア 道徳の授業づくり

東日本大震災では、中学生が「津波が来るぞ。逃げろ。」という声をかけながら避難したことで、小学生や地域の住民も一緒に避難し、多くの命が救われた。これらの災害の教訓として、自助・公助だけではなく、共助の考え方について学んでいくことも大切である。しかし、避難訓練で児童の様子を観察すると、助け合いながら避難しようとする児童がいない状況であり、お互いが助け合う「共助」の大切さを教える必要があると考えた。そこで、「宮崎市防災教育手引書」を参考にして授業づくりを行い、指導の概略を【表1】のように考えた。

【表1 防災学習（道徳）の指導の概略】

主 題 名	みんなのために 3－(1) 生命尊重				
指導する学年	高学年	指導する時間	道徳	指導する時間	1時間
目 標	生命がかげがえのないことを知り、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。				
使用する教材	【動画】DVD「津波から逃げる」（気象庁）【書籍】「つなみ・みんなの命を守る授業」p1-6参照				
学 習 内 容	(導入) ○ 津波の動画を観て、津波の被害を再認識させる。 (展開) (1) 資料「稲むらの火」を読み、儀兵衛の気持ちを考える。 (2) 地震後に津波を察知した時・稲むらに火をつける時の儀兵衛の気持ちについて考える。 (3) 文集「つなみ」の作文を聞く。 (4) 自分自身のことを振り返る。 (終末) ○ 指導者の話を聞く。				

イ 学級活動の授業づくり

意識調査の結果から、津波発生の仕組と対処行動について学習する必要があると考えた。さらに、対処行動について考える場面で、共助についても意識させたいと考えた。そこで、「宮崎市防災教育手引書」及び、昨年度実施した学級活動を参考に授業づくりを行い、指導の概略を【表2】のように考えた。

【表2 防災学習（学級活動）の指導の概略】

題 材 名	津波の発生の仕方を知り、対処行動を考えよう				
指導する学年	全学年	指導する時間	学級活動	指導する時間	1時間
目 標	津波の発生の仕組を理解し、津波発生時に、自他の安全を確保する対処の仕方を考え、判断することができる。				
使用する教材	(資料) 宮崎県に被害を与えた主な地震一覧（宮崎県ホームページ） 南海トラフ県被害想定（宮崎日日新聞） (動画) DVD「津波に備える」（気象庁）				
学 習 内 容	(導入) (1) 東日本大震災の映像から津波の被害を再認識させる。 (2) 宮崎市でも大きな地震と津波が発生する可能性があることを知る。 (展開) (1) 津波が発生する仕組を知る。 (2) 津波から避難する方法を考え、避難の仕方を知る。 (終末) (1) 避難のときに意識することをまとめる。 (2) クイズ形式のふり返しシートで学習した内容の確認をする。 (3) 感想を記入し、発表する。				

3 避難訓練の改善

9月の避難訓練の反省を基に下の3つの視点で、避難訓練を改善する必要があると考えた。

ア 学校の実態に合わせた避難方法の在り方について

- ・ 県のハザードマップによると、実施校は津波による浸水域ではない。しかし、学校外で津波から逃げる際には高い場所へ避難することを教える必要がある。そこで、学校の高い場所である3階に避難する訓練をしておく必要があると考えた。
- ・ 地震の揺れがおさまった後、すぐ3階に避難をすべきであるが、大規模校であるため、一度各教室に戻らせ、児童の人数把握を確実にしてから、落ち着いて3階への避難をさせた方がより安全であると考えた。

イ 児童の行動改善の視点及び手立て

- ・ 地震発生の放送を聞き、身の安全を守れない児童が多くいることが分かった。そこで、震度7の揺れの強さや、その時の状況を児童に理解させる必要があると考えた。
- ・ 地震の揺れがおさまった後の避難行動で、「自分だけ避難をすればよい。」のではなく、「共助」の考え方をもちことも大切である。特に、高学年には「必要に応じて声をかけながら避難する」ことを指導する必要があると考えた。

以上のことにより、児童の行動改善の視点及び手立てを【表3】のように考えた。

【表3 児童の行動改善の視点及び手立て】

① 身の安全を守る（頭を守り、低い姿勢をとる）

事前指導で、震度7の揺れの強さと状況を確認することで、対処行動の必要性を理解させる。

- 教室・・・窓や棚、テレビから離れ、机の下にもぐる。
- 廊下、体育館・・・窓から離れ、頭を保護し、低い姿勢をとる。
- 屋外・・・遊具等から離れ、低い姿勢をとる。
- トイレ・・・トイレから出て、頭を保護し、低い姿勢をとる。

② 共助の意識

事前指導で、高学年に「必要に応じて声をかけながら避難する」ことを指導する。その際、具体的な場面を想定しながら児童に考えさせることで、共助の大切さに気付かせる。

ウ 職員の行動改善の視点及び手立て

- ・ 地震の効果音が流れている際に、職員が児童へ対処行動について指導をしている場面が見られた。しかし、実際の地震発生を想定し職員も児童と一緒に対処行動をとり、身の安全を守ることが大切であると考えた。
- ・ 停電を想定し、拡声器による指示を行ったが、聞き取りにくい場所があった。そこで、どの教室にも指示が聞こえるように工夫する必要があると考えた。

以上のことにより、職員の行動改善の視点及び手立てを【表4】のように考えた。

【表4 職員の行動改善の視点及び手立て】

① 児童と一緒に身の安全を守る（頭を守り低い姿勢をとる）

避難訓練提案の際に、地震発生の放送を聞いて、児童へ声をかけながら避難者のモデルとして一緒に身の安全を守ることの大切さを確認する。

② 非常用放送設備を使う

停電をしても使える非常用放送設備を使い、指示が聞こえるようにする。また、校舎内残留者確認の職員（4人）も指示を出すことで、避難がスムーズに行われるようにする。

4 研究内容の検証

(1) 検証授業（道徳）

ア 小学校 第5学年「道徳」（資料名：稲むらの火）

(ア) 本時の目標

生命がかげがえのないことを知り、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

(イ) 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	準備物
導入	1 津波の動画を見て、感想を述べる。	○ DVD を見せることで津波の被害を再認識させる。	DVD「津波から逃げる」
展開	2 資料「稲むらの火」を読み、話し合う。 (1) 地震が起き、津波を察知した時の儀兵衛の気持ちを考える。 地震発生後に津波が発生すると察知した時、儀兵衛はどんなことを思ったのでしょうか。	○ 地震・津波が今後どのような影響を及ぼすかという不安と村人を心配する儀兵衛の気持ちに共感させる。	読み物資料 ワークシート
	(2) 稲むらに火をつける時の儀兵衛の気持ちを考え、自分の考えを伝え合う。 稲むらに火をつける時、儀兵衛は、どんなことを思ったのでしょうか。	○ 村人の命を救うために稲むらに火をつけよう決心するまでの儀兵衛の心の迷いを考えさせる。 ○ 稲むらが、生活していく上でとても大切なものであることを確認することで、儀兵衛の心の葛藤に共感させる。	
	3 文集「つなみ」の作文を読む。	○ 資料から離れ、生命の大切さに焦点を絞る。	書籍「つなみ」
	4 自分自身のことを振り返る。 生命が大切だと感じたのはどんな時ですか。	○ 自分自身を振り返らせる。	
終末	5 指導者の話を聞く。	○ 災害時にも自他の生命を大切にしている心情を高められる話をする。	書籍「みんなのいのちを守る授業」

(ウ) 授業の実際

導入場面では、津波の被害を再認識させるために映像を見せた。津波で家や車が流される映像だったので、津波の恐ろしさを再認識させることができた。展開場面では、まず、儀兵衛の気持ちに共感させるために、「地震が起き、津波を察知した時の儀兵衛の気持ち」を考えさせた。さらに、「稲むらに火をつける時の儀兵衛の気持ち」を考えさせた。ここでは、稲むらの価値を確認することで、儀兵衛の心の葛藤に共感させた。板書で話の流れや考える視点を提示したことで、儀兵衛の気持ちに共感しやすかったようだった。儀兵衛が村人を助けたことを知ることによって、共助の考えと行動は、多くの生命を守ることができることに気づかせることができた。次に、実際に被害に遭った児童生徒の文集「つなみ」の作文を読み、生命の大切さに焦点を絞った後、「あなたは、生命が大切だと感じたのはどんな時ですか。」という問いにより、自分自身の振り返りをさせた。生命に関する経験や生命の大切さについて、どの児童も書くことができた。終末場面では、災害時でも自他の生命を大切にしている心情を高めるために、実際の災害で見られた共助の話をした。

(エ) 成果

終末で、実際に津波被害を受けた児童が、「多くの人からの支援があったからこそ、今の自分がある。」などと書いた作文を聞かせることで、「自他の生命を大切にしたい。」と多くの児童がワークシートに書くことができおり、共助に対する意識が高まったと感じられた。

(2) 検証授業（学級活動）

ア 中学校 第3学年「学級活動」（題材名：津波の発生の仕方を知り、対処行動を考えよう）

(ア) 本時の目標

津波の発生の仕組みを理解し、津波が発生したときに、自他の安全を確保する対処の仕方を考え、判断をすることができる。

(イ) 学習指導過程

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	準備物
導入	1 津波についてのDVDを見る。 2 宮崎県でも、近い将来このような災害が発生する可能性が高いことを知る。 3 本時の学習課題を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">津波を知り、対処の仕方を考えよう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 津波の被害を再認識させる。 ○ 地震の歴史年表を用いて、過去に宮崎に大きな被害を与えた地震が数多くあったことを知らせる。 ○ 新聞記事を基に、今後日向灘域、南海トラフで大きな地震と津波が発生し、甚大な被害が出ると予測されていることを知らせ、地震・津波から身を守ることについて意識づけを行う。 	気象庁 DVD 「津波に備える」のオープニング
展開	4 津波が起きる仕組みについて知る。 (1) 一次避難の仕方を振り返る。 (2) 津波の発生の仕組み、海面の様子、強さなどについて考える。 (3) DVDを見る。 5 校外にいる時に地震が発生したら、どのように津波から避難するかグループで考え、発表する。 6 各グループの発表をまとめる。 7 DVDを見て、避難するときの注意事項を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」を根拠とした一次避難について確認する。 ○ アンケートの結果を参考に津波の仕組みについて確認をする。 ○ 大きく4種類の場所(状況)を設定し、対処行動を考える。 ○ 共助についての意見を確認する。 ○ 避難時に大切なことを確認する。 	気象庁 DVD 「津波に備える」
終末	8 本時のまとめをする。 (1) 避難するときに意識することについて聞く。 (2) 振り返りシートで、学習内容の確認をする。 (3) 感想を記入し、発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 避難の仕方についてまとめる。 ○ クイズ形式の振り返りシートにまとめる。 	ワークシート

(ウ) 授業の実際

導入場面では、津波の被害を再認識させるために映像を見せた。また、宮崎に被害を与えた主な地震一覧と南海トラフ被害想定を示すことで、宮崎県でも大きな地震や津波が発生する可能性があり、津波の発生の仕組みや避難の仕方についての学習が必要であることを意識させた。

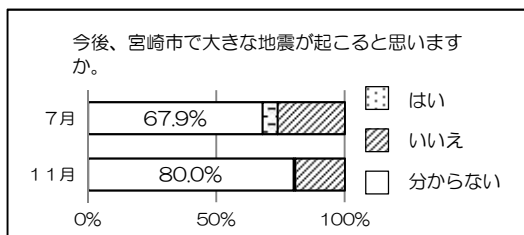
展開場面では、まず、地震発生時の一次避難の仕方について確認した。次に、津波発生のメカニズムや特性について、今まで知っている知識を引き出した後、DVDを活用し、正しい知識を身に付けさせた。グループ活動では、場面設定を行い、①学校外で地震・津波が発生したときの避難方法と②困っている人が近くにいるときの対応について話し合わせた。活動時間を5分間に設定したことで、緊迫感をもって、対処行動を考えることができた。発表内容は、①については、多くのグループが高い所へ逃げるという点で一致していた。②については、自他の生命に関して、助けるのか、助けないのか、迷い、葛藤したグループ活動の様子が伝わり、積極的に話し合いができたことが感じ取れた。その後、避難の仕方についてのDVDを見せることで、避難するときに気をつけることを学習させた。

終末場面では、素早く的確に避難すること(①とにかく高い所へ逃げる。②状況によっては、荷物なども捨てて逃げる判断の必要性。③声をかけて、周りも巻き込んで逃げて欲しいこと)の重要性を伝えた。最後に、津波について正しい知識が身に付いたか確認するために、振り返りシートに取り組みせ、感想を発表させた。感想には、「実際に避難の仕方考えたが、焦ってしまった。もし本当に災害に遭ったら、パニックになり、行動するまでに時間がかかると思った。だから、冷静に素早く正確な判断ができるように日頃から防災について意識しておきたい。」などの意見が多く、防災・減災の意識の向上が見られた。

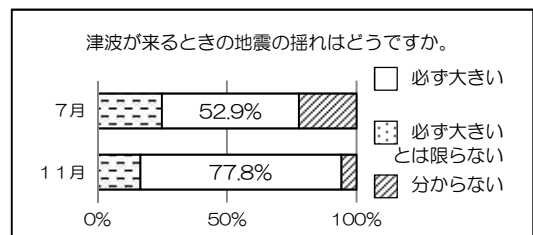
(エ) 成果

授業後に意識調査を実施(対象は7月実施と同じ)したところ、「今後、宮崎市で大きな地震が起こると思う」【図8】と答えた児童生徒は12%増えた。また、津波の発生や仕組みに関する問いでは、「津波が来るときの地震の揺れは、必ず大きいとは限らない」【図9】が25%増、

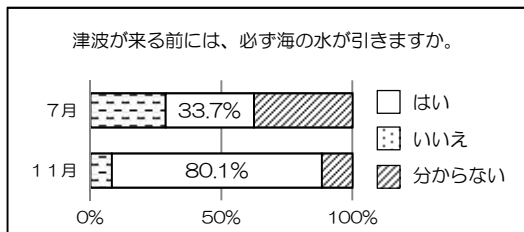
「津波が来る前には、必ず水が引くとは限らない」【図 10】が 46%増、「津波は1波だけでなく、何度も来る」【図 11】が 17%増などと授業を通して生徒の危機意識を高めることができ、津波に関する基本的事項の理解度が高まったことが分かった。津波への対処行動についての問い「津波注意報や津波警報が出されたときにどのような行動をとるか。」【図 12】では、人の指示や判断を待つとした割合は減ったが、「高いところへ逃げる」の割合は7月とほとんど変化が見られなかった。これは、いくつかの場面を設定して、津波からの避難方法を考えさせる中で、状況によっては高い所よりも遠いところに逃げる方が安全な場合もあるという意見も出ていたためだと考えられる。「災害が起きた時に、あなたが出来ることは何か。」【図 13】の問いでは、他人の命を守るような言動について記入している児童生徒が増え、「分からない、ない」とした児童生徒は7月に比べると9%少なくなっており、「周りの人を巻き込んで、一斉に逃げる」や「大きな声を出して、避難を呼びかける」などの意見が出ており、共助の意識が高まったと考える。



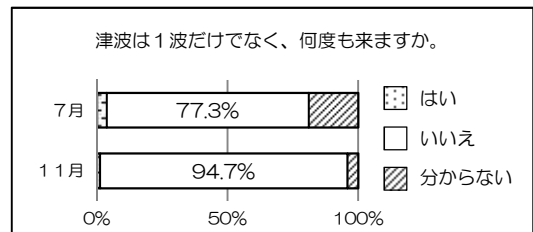
【図 8】



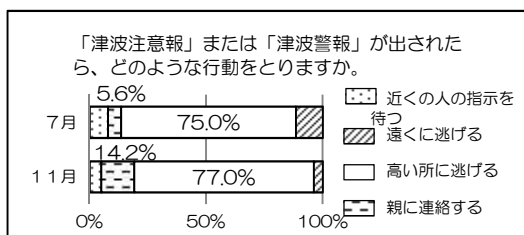
【図 9】



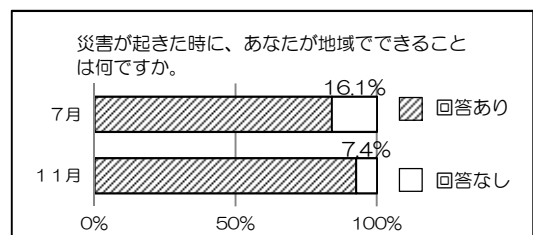
【図 10】



【図 11】



【図 12】



【図 13】

(3) 避難訓練の分析 (平成25年12月13日: 研究員の所属する小学校)

避難訓練を実施し、9月の避難訓練に比べて、児童と職員の動きの変化を検証した。学習指導案【表 5】において、下線を児童・職員の行動改善の視点及び手立てとして記載した。

ア 概要

- ・ 縦割り清掃班による清掃時間中の実施。
- ・ 震度7の地震発生と想定。揺れがおさまった後に緊急地震速報で津波警報が発令。
- ・ 児童は、各学級に集合し整列、人数確認の後、決められた校舎3階の各教室に避難。
- ・ 停電しても使える非常用放送設備を使用。

イ 児童の行動の変容 (○よい点、●改善すべき点)

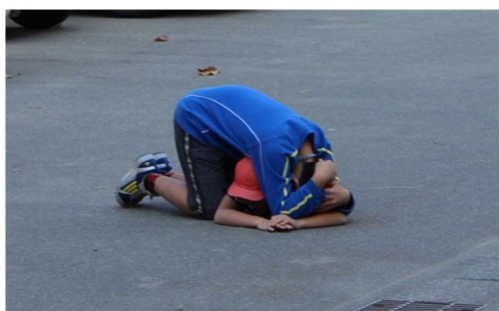
- 事前指導で、地震が発生したらどのような状況になるのかの映像を見せたことで、訓練の放

送が流れたら、すぐに頭を守り、低い姿勢をとる児童が多かった。

- 共助の姿もみられ、高学年の児童が低学年を守りながら低い姿勢をとる姿が見られた。
- 自分の教室に避難する際、低学年は走っている姿が見られたことから、「おはしも」についての事前指導や常時指導の在り方が課題である。

ウ 職員の行動の変容 (○よい点、●改善すべき点)

- 地震が起きた際、児童と一緒に身の安全を守ることについては、職員間で共通理解を図ったことで9月の訓練よりも向上していた。
- 非常用放送設備を使ったが、一部では聞こえづらかったこともあったことから、非常用放送設備とあわせて拡声器を使用した指示を出すことで、避難が遅れないようにする必要がある。



【共助の様子：児童が児童を守る】



【共助の様子：児童が児童に指示を出す】

【表5 避難訓練の学習指導案】

時間	活動内容	指導上の留意点
事前指導	○ 朝の時間に以下の内容を指導する。	
朝の時間	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今週中に地震・津波避難訓練を実施する。 ・ 「おはしも」の確認 (1～4年生) ・ 休み時間・昼休み・清掃時に地震が起こった場合は、まず自分の教室に戻ることに。(運動場から避難する場合は、下履きを履いたままでよい。) ・ 地震が起きたら、頭を守り、低い姿勢をとる。(DVD視聴) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 避難経路、場所の確認 ・ 共助の意識 (5・6年)
13:45	<p>1 地震発生の音 (放送) を聴き、安全確保をする。</p> <p>① 訓練です。ただいま、大きな地震が発生しています。教室にいる人は、机の下にもぐりなさい。教室以外にいる人は、低い姿勢をとりなさい。(教頭の放送)</p>	○ 職員は、近くの児童に頭を守り低い姿勢をとるように指示しながら、 <u>児童と一緒に身の安全を守る。</u>
13:47	<p>2 指示を出す。<u>(非常用放送設備)</u></p> <p>② 地震は収まりました。教室に戻りましょう。</p> <p>3 テレビやラジオ、インターネット、市防災情報等により、情報を収集する。(事務主幹、事務局)</p> <p>4 情報を基に、津波への避難場所、避難経路を決定する。 【場所：事務局】(校長・教頭・事務主幹)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 停電を想定し、非常用放送設備で連絡する。 ○ 校舎内の残留者確認の職員は、地震がおさまった後、<u>担当校舎に移動しながら、近くにいる児童に教室へ戻るよう指示する。</u>「おはしも」を守り、右側通行で移動するように指示しながら、残留者の確認にあたる。 ○ 学担不在のクラスは、学年の職員で対応する。 ○ 学担は、戻ってきた児童に帽子等で頭を守り、無言で次の指示を待つようにさせる。その際、児童を出席番号順に整列させ、人数を確認する。
13:52	<p>5 避難指示を出す。</p> <p>③ 津波のおそれがあります。児童の皆さんは、先生の指示に従い、南校舎3階に避難します。</p>	○ <u>校舎内の残留者確認の職員は、担当校舎に待機し、教室にいる職員や児童に聞こえるように南校舎の3階に避難することを指示する。</u>

Ⅶ 成果と課題

1 研究の成果

「宮崎市防災教育手引書」を参考に、特別活動だけでなく道徳の授業の中でもより具体的な防災学習の場を設定したことで、児童生徒がさらに状況に応じて的確な判断をし、自他の命を守ろうとする意識を高めることができた。

昨年度作成した避難訓練の「児童と職員の行動改善の視点および手立て」を基に各学校に応じた避難訓練を実施したことで、自他の安全を確保しようとする行動が見られた。また、映像や音声を活用した事前指導により、災害時における危険を認識した行動が取れるようになった。

2 研究の課題

防災学習の授業づくりには多くの時間がかかり実践するのが負担となる面があるため、今後は、道徳や特別活動以外の教科の中でも防災教育に関する手引き（宮崎市防災教育手引書）等を活用し、防災教育の充実を図っていく必要がある。

また、防災への意識を常にもたせるために、朝の会・帰りの会や集会などの全教育活動を通じた継続的な指導の在り方を研究する必要がある。

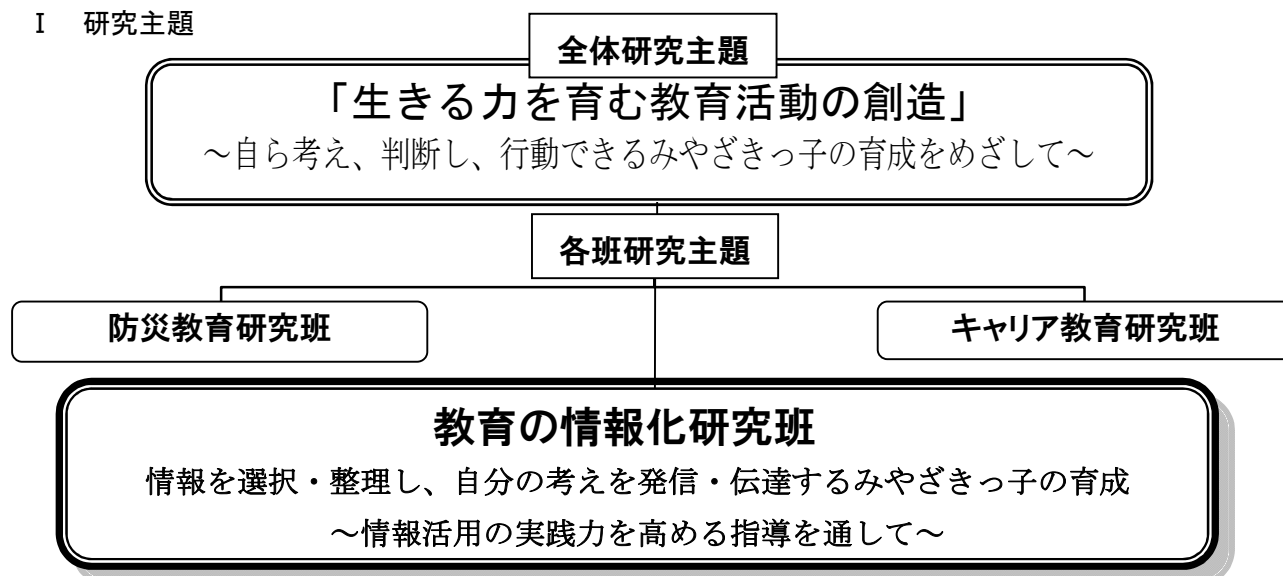
<引用・参考文献>

- 「小学校指導要領」文部科学省
- 「中学校指導要領」文部科学省
- 宮崎市防災教育手引書 宮崎市教育委員会
- 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育（文部科学省、平成22年3月）
- 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き（文部科学省、平成24年3月）
- 釜石市津波防災教育のための手引き（釜石市教育委員会・釜石市市民部防災課・群馬大学災害社会工学研究室、平成22年3月）
- みやぎの自然災害地震・津波・火山・気象災害を知って備える（みやぎ公共・協働研究会、平成24年6月）
- 宮崎市津波ハザードマップ（宮崎市、平成25年12月）

<研究同人>

宮崎市教育情報研修センター			
所 長	有村 政美		
指導主事	金丸 賢一		
研 究 員	藤田 泰介（宮崎市立内海小学校）	古田 健一（宮崎市立赤江中学校）	
	錦織 謙一（宮崎市立恒久小学校）	黒田 芳伸（宮崎市立櫛中学校）	
	金丸 宏美（宮崎市立大宮小学校）	長友 由子（宮崎市立田野中学校）	

I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められている。さらに、教科等を横断して改善すべき事項として、情報教育、キャリア教育、安全教育などがあげられている。

また本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定されており、その中で、確かな学力やキャリア教育等の充実が求められている。また、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震の活動化を受け、昨年度より市内の小中学校に新たに防災主任を置いた。さらに、本年度、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進に努めているところである。

昨年度より、本研究班では、児童生徒の思考力・判断力・表現力を育むために「情報活用の実践力」を高めていくことに着目し、「情報を選択・整理し、自分の考えを発信・伝達するみやざきっ子の育成」を研究主題として研究を進めてきた。昨年度は、「情報活用の実践力」に関するアンケートの実施、分析を基に、「情報活用の実践力」段階表や活動モデルを作成し、学習のねらいを明確にした授業づくりに取り組んできた。その結果、情報を選択・整理し、自分の考えを発信・伝達する力が伸びてきているなどの成果が見られた。しかし、小中9か年における児童生徒の発達段階に応じたつながりのある学習指導を行っていく必要性や「情報活用の実践力」の各能力の育成を図る活動モデルの在り方をさらに研究していくことが課題として残った。

そこで、本年度は、前年度の研究内容を踏まえ、「情報活用の実践力」について児童生徒の側からもアンケートを実施し、その実態分析を基に段階表や活動モデルの見直しを行っていくことで、児童生徒の発達段階に応じたつながりのある学習活動を構築していくことにした。

III 研究目標

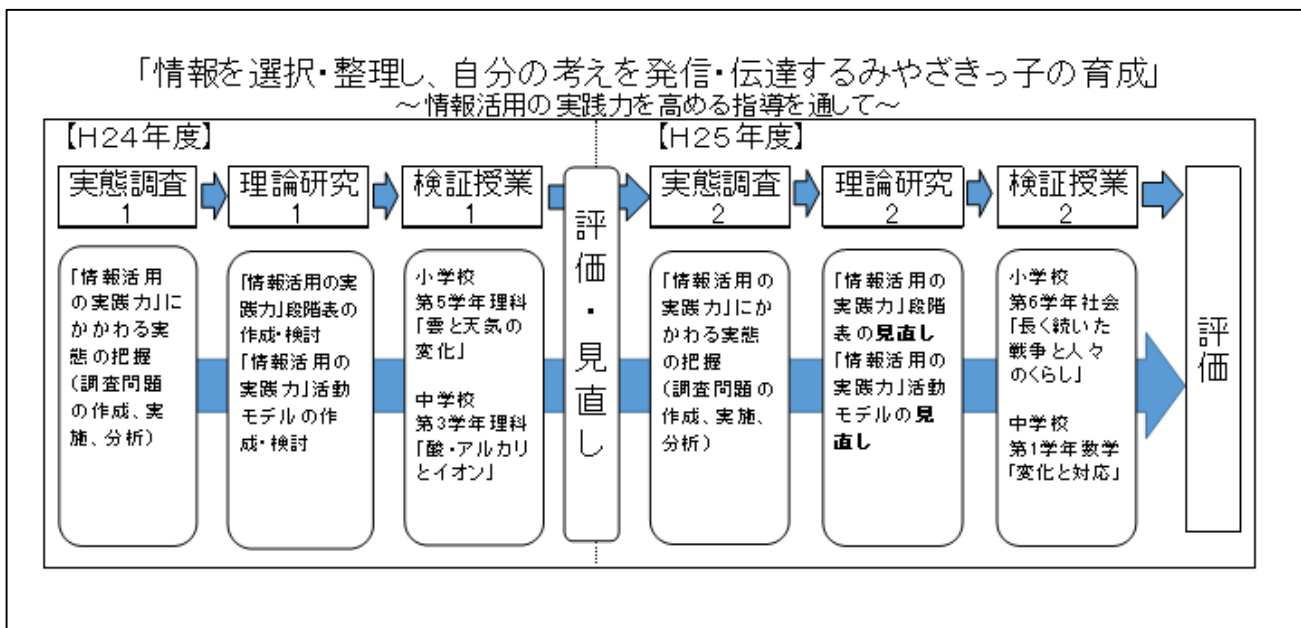
情報を選択・整理し、自分の考えを発信・伝達するみやざきっ子を育成するために、情報活用の実践力を高める指導の在り方を究明する。

IV 研究仮説

児童生徒の実態を踏まえ、小中9か年を見通した「情報活用の実践力」を育成するための段階表や活動モデルを見直し、学習指導過程に位置づけて授業を実践すれば、情報を選択・整理し、自分の考えを発信・伝達する児童生徒を育成することができるであろう。

V 研究構想および研究計画

本研究の構想および計画をまとめると【図1】のようになる。



【図1】 研究構想および研究計画

VI 研究の実際

1 実態調査

(1) 調査方法

「情報活用の実践力」にかかわる実態調査を行うにあたり、「情報活用の実践力尺度の作成と信頼性及び妥当性の検討」(1999 高比良ら)を参考にした。「情報活用の実践力」を収集力、判断力、表現力、処理力、創造力、発信・伝達力の6つの能力に分け、【図2】のように、各能力について6つの質問を設け、4段階で回答するようにした。

2 次のアンケートに、番号で答えてください。

4 とてもあてはまる	3 だいたいあてはまる
2 あまりあてはまらない	1 まったくあてはまらない

(1) 収集力

- 興味をもったことについては、人に言われなくても進んで調べることができる。
(4 3 2 1)
- 授業中わからないことがあったら、先生に質問をしたり、教科書や参考書で調べたりしている。
(4 3 2 1)
- わからない事柄があったら、辞書や辞典を引くようにしている。
(4 3 2 1)
- わからない事柄があったら、インターネットを使って調べている。
(4 3 2 1)
- 新聞やテレビのニュースをよく見ている。
(4 3 2 1)
- 問題の解決のための資料を自分で集めることができる。
(4 3 2 1)

【図2】「情報活用の実践力」についてのアンケート (一部)

(2) 調査対象

- 平成25年度 宮崎市内の小学校3校の児童98名、中学校3校の生徒101名、計199名

(3) 調査の目的

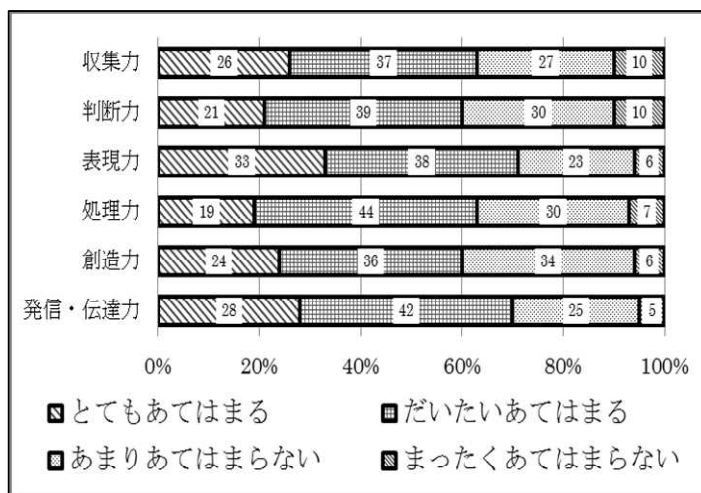
- 収集力、判断力、表現力、処理力、創造力、発信・伝達力の6つの能力について、児童生徒の実態を把握する。
- 12月に再度実施し、研究の成果を確認する。

(4) 結果および考察

【図3】は、各能力について、6つの質問についての集計結果である。

6つの能力の中で、「判断力」「創造力」については、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」という否定的な回答が40%を超えており、課題として挙げられる。

そこで本年度は、昨年度作成した『情報活用の実践力』段階表『情報活用の実践力』活動モデルについて、特に「判断力」「創造力」を定着させるための具体的な手立てを講じながら、6つの能力を高められるような実践を進めていくことにした。



【図3】「情報活用の実践力」実態調査結果 H25 児童生徒向け

2 理論研究

(1) 「情報活用の実践力」段階表の見直し

ア 見直しの視点

昨年度の研究では、【表1】にある「情報活用の実践力」の各能力の解釈を基に、各能力を伸ばすための具体的な学習活動を検討し、『情報活用の実践力』段階表を作成している。

本年度の研究では、昨年度作成した段階表のそれぞれの段階に設定した学習活動について、その段階で適しているかどうか、妥当性の検討を行うことにした。

【表1】本研究における「情報活用の実践力」の各能力の解釈

能力名	本研究班による解釈
A 収集力	課題や問題を基に、進んで情報を集め、調べることができる。
B 判断力	集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すことができる。
C 表現力	文・図・表を作成するなど、情報を整理することができる。
D 処理力	整理した情報から筋道を立てて考え、分析することができる。
E 創造力	得た情報に自分の見方、考え方を加え、作り変えることができる。
F 発信・伝達力	相手に伝わるように、自分の考えを分かりやすく伝えることができる。

イ 作成の方法

本市の教員に対するアンケートの結果と、児童生徒の実態、小中9か年における発達の段階を十分に考慮して、昨年度の段階表を見直し、【表2】の新しい段階表を作成した。

例えば、「収集力」における「わからない事柄があったら、辞書や辞典を引く。」は、辞書指導が行われる小学校中学年以上とした。また、「わからない事柄があったら、インターネット

を使って調べる。」については、小学校高学年では自力で調べるためのコンピュータリテラシーが十分高まっていると判断できること、また、学習指導要領から小学校社会科の第5学年「我が国の農業や水産業」において食料生産の盛んな地域について調査する際、インターネットを活用することが位置づけられていることなどから小学校高学年以上とした。

このように、「情報活用の実践力」の各能力を伸ばすためには、発達の段階に適した学習活動があり、どの段階でどのような学習活動を行っていくことが効果的であるかを整理した。

【表2】「情報活用の実践力」段階表

能力名 段階	A 収集力	B 判断力	C 表現力	D 処理力	E 創造力	F 発信・伝達力
		課題や問題を基に、進んで情報を集め、調べることができる。	集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すことができる。	文・図・表を作成するなど、情報を整理することができる。	整理した情報から筋道を立てて考え、分析することができる。	得た情報に自分の見方、考え方を加え、作り変えることができる。
低学年	①授業中わからないことがあったら、先生に質問をしたり、教科書や参考書で調べたりする。	①自分と友達の意見の同じところや違うところを考える。	①学習内容をノート等にわかりやすく整理する。 ②文章を読むとき、大切なところに線を引く。	①いくつかの情報から、共通点を見つけ出す。	①自分の考えを発表する。	①相手に聞かせるようにはっきり話す。
中学年	②興味をもったことについては、人に言わなくても進んで調べる。 ③新聞やテレビのニュースを見て、情報を集める。 ④わからない事柄があったら、辞書や辞典を引く。	②新聞やテレビで知った情報が本当に正しいかどうか考える。 ③対立する意見があるときはいつも、両方の言い分を聞いてそれぞれの情報の良し悪しを判断する。 ④たくさん資料の中から必要な情報を見つけ出す。	③調べたことをまとめるとき、文章だけでなく絵や図、表・グラフなども活用する。 ④集めたたくさんさんの情報を種類ごとに分類する。	②問題を解くとき、思いつきで結論を出すのではなく、筋道を立てて考える。	②人の意見と自分の意見の違いを考えて発表する。 ③人の意見に流されず、自分の考えをもつ。	②発表の前に、言うべきことを整理して話す。 ③発表をする際は、理由や根拠を述べる。 ④自分の考えを、資料を提示しながら説明する。
高学年	⑤わからない事柄があったら、インターネットを使って調べる。	⑤インターネットで知った情報が本当に正しいかどうか考える。	⑤本やインターネットの文章を読むときに必要なことをメモにとる。	③意見がたくさんあっても、うまくまとめる。 ④図や表にまとめられた資料から、必要な情報を読み取る。	④人の意見を聞いて、さらに発展した考えをもつ。	⑤相手の反応を確かめながら話す。 ⑥考えたことや調べたことをわかりやすい文章で書き表す。
中学校	⑥目的に応じて情報ツールを選択し、調べる。	⑥手に入れた情報が古くないか注意する。	⑥文・図・表の特徴を理解し、効果的に情報を整理する。	⑤多くの資料を検討して、学習課題に対する結論を導く。	⑤物事を人とは違う観点から考える。 ⑥学習課題に対する答えを導き出した後に、さらにより解法を探す。	⑦相手に応じて、適切な伝達手段を使い分ける。

ウ 活用の方法

段階表に示した学習活動を各教科の学習に位置付け、意図的・計画的に取り組んでいくことで「情報活用の実践力」は育まれていく。そこで、教科の特性や単元のねらいなどを踏まえながら、各教科・領域の年間指導計画に位置付けることにした。また、指導学年の前の段階で身に付けてほしい能力を確認し、系統的に指導するようにした。

この段階表のそれぞれの段階場面で書かれている活動については、その段階が児童生徒の発達に適しているが、それ以前の段階でもできる範囲で取り組んだり、それ以降の段階においても繰り返し行ったりすることで、より能力の向上が期待できる。また、1つの授業の中でその段階のすべての学習活動を行うというのではなく、それぞれの教科や授業内容にあった学習活動を取り入れていくことが適している。このように、発達の段階や児童生徒の実態にも応じながら弾力的に活用していくことにした。

(2) 「情報活用の実践力」活動モデルの見直し

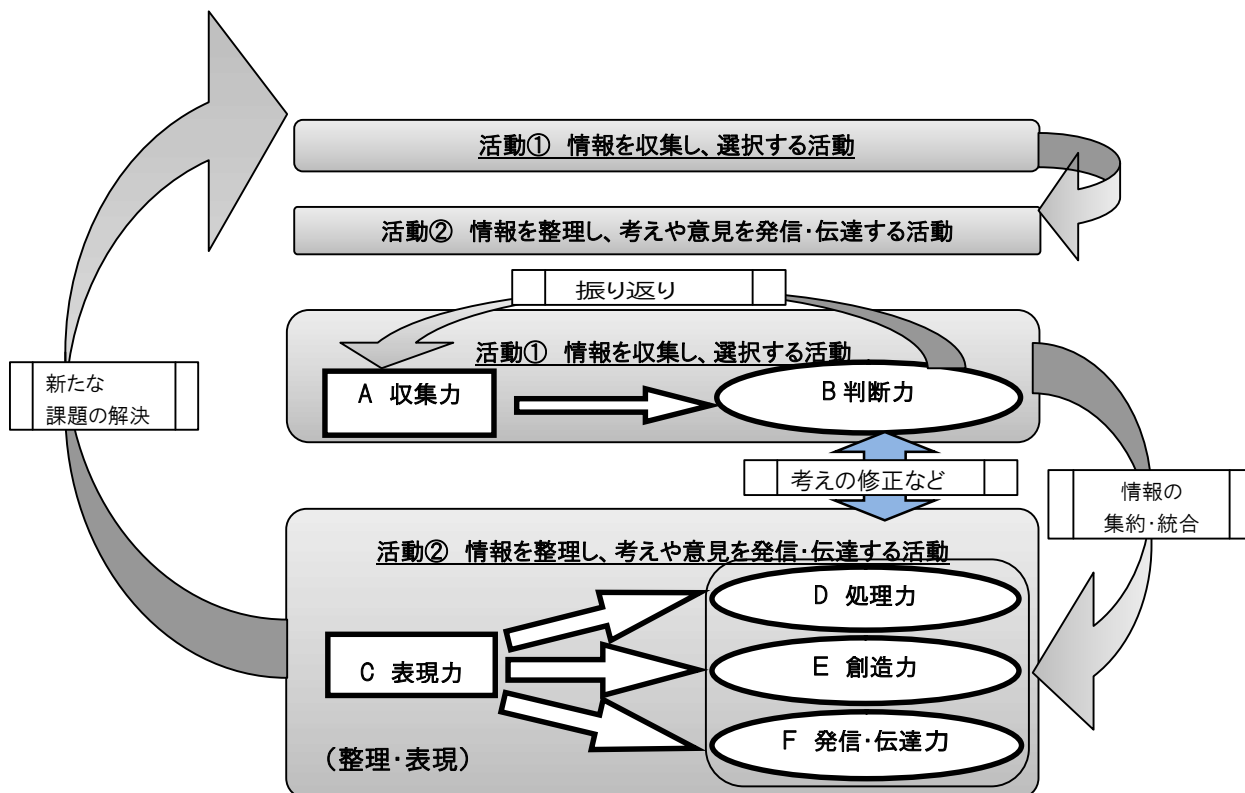
ア 基本的な考え方

昨年度の研究においては、「中学生の『情報活用の実践力』における構造モデルの検討」(2008市原ら)を参考にし、各能力に適切に関連付けながら、「収集力を起点に判断力を育成する学習プロセス」と「表現力を起点に処理力、創造力、発信・伝達力を育成する学習プロセス」という2つの構造をもたせた活動モデルを作成した。

活動モデルは、収集力を起点に判断力を育成する学習プロセスを活動①「情報を収集し、選択する活動」、表現力を起点に処理力、創造力、発信・伝達力を育成する学習プロセスを、活動②「情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動」とし、この2つの活動を基本としている。

活動①の収集力が判断力を支える理由は、判断力が「集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すことができる能力」であり、それを高めるためには、「課題や問題を基に、進んで情報を集め、調べることができる能力」である収集力の形成が必要だからである。

活動②の表現力が処理力、創造力、発信・伝達力を支える理由は、処理力、創造力、発信・伝達力が、総じて「整理された情報を分析し、自分の考えをまとめたり、相手に伝えたりする能力」であり、それらを高めるためには、「文・図・表を作成するなど、情報を整理することができる能力」である表現力の形成が必要だからである。



【図4】「情報活用の実践力」活動モデル

イ 見直しの視点

本年度の課題である「判断力」「創造力」の育成を図るため、以下の3点について見直しを行った。

一つ目は、「振り返りの場」を設定した点である。情報を収集した後、その選択が適切であるか判断したり、不十分であるときには再度収集にもどったりする場を設定することで、児童生徒の判断力の育成につながると考えた。

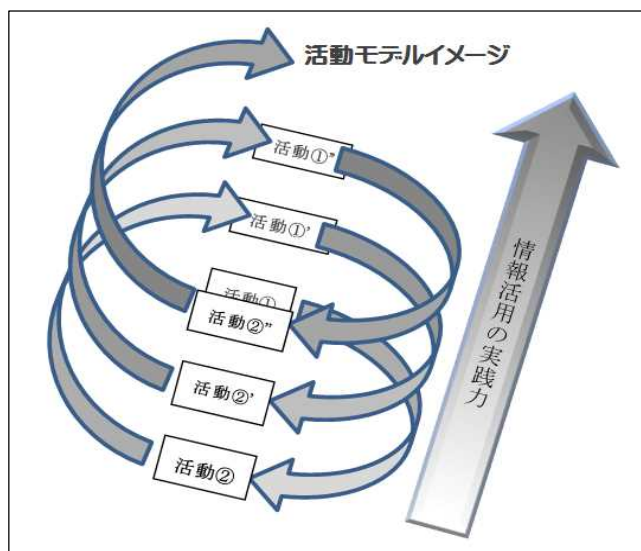
二つ目は、考えの修正の場において、「人の意見と自分の意見の違いを考えさせたり、人の意見を聞いてさらに発展した考えをもたせたりする場」を設定した点である。これにより、情報を作り変える創造力の育成につながると考えた。

三つ目は、活動②の後に「新たな課題の解決」を位置付け、活動が連続するようなモデルに変更した点である。学習内容につながりをもたせ、活動モデルで示した学習活動を連続的に展開させることで、より「情報活用の実践力」を育成することにつながると考えた。

以上を踏まえ、本年度は、【図4】のような活動モデルを作成した。

ウ 活用の方法

活動モデルの活用については、一単位時間での活動①、活動②の実践を基本としている。また、学習内容に応じて、一単元の中で活動①、活動②の2つの活動を螺旋状に繰り返していくことで、児童生徒の「情報活用の実践力」は向上すると考えた。【図5】は、活動モデルイメージである。



【図5】活動モデルイメージ

3 授業研究

(1) 検証授業（小学校）

ア 実施学年・教科および単元名 第6学年 社会科 「長く続いた戦争と人々の暮らし」

イ 各活動に応じた主な手立て

活動	手 立 て
活動①	教科書や資料集、インターネットの資料から必要な情報を見つけ出し、キーワードを発表させることで、本時に調べる観点を確認する。 (収集力、判断力)
活動②	ノートに自分の考えをまとめ、話し合うまでの手順を明確に示すことで、主体的に、事実だけではなく、その事実から「分かること」、「予想できること」、「思ったこと」などの自分の考えを書いて、話し合わせる。 (創造力)

ウ 本時の目標

- 沖縄戦、広島・長崎への原爆投下により、多くの人々が犠牲になって終戦を迎えたことを理解することができる。 (社会的事象についての知識・理解)

エ 学習指導過程

段階	主な学習内容および学習活動	指導上の留意点	情報活用の実践力 段階表との関連
導入 (10分)	1 終戦の日のニュース映像を見て、終戦の日について考える。 2 戦争が終わった理由を予想する。 3 本時のめあてを確認する。 めあて 戦争は、どのようにして終わったのか調べよう。	○ 日本人は終戦の日を大切にしていることを知らせ、終戦の日について考えさせる。 ○ ニュースの映像をもとに予想させる。	
展開 (30分)	活動① 情報を収集し、選択する活動 4 教科書や資料集、インターネットの資料を読んで、本時のキーワードを探す。	◎ <u>教科書や資料集、インターネットの資料から必要な情報を見つけ出し、キーワードを発表させることで、本時に調べる観点を確認する。</u> (収集力⇔判断力) ○ 同じ内容が書かれてある資料は、どちらも同じ情報が書かれてあるか確認させる。	振り返り A - ⑤ B - ④
	活動② 情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動 5 戦争が終わるまでの出来事についてノートにまとめる。 ○ 沖縄戦について ○ 広島・長崎の原爆投下について 6 ノートにまとめたことをもとに全体で話し合う。 ○ 沖縄戦について ○ 広島・長崎の原爆投下について	○ ノートにまとめる際の手順を確認させる。 ○ 文章に赤線を引き、事実を項目ごとにノートに書き出させる。 (表現力) ○ 図や表から事実を読み取り、書き出させる。 (処理力) ◎ <u>事実から「分かること」、「予想できること」、「思ったこと」などの自分の考えを書かせる。</u> (創造力) ○ ノートの整理が終わったら、ペアで意見を交換させる。 (発信・伝達力) ○ 考えの根拠となる資料の番号や資料からどんなことが分かるのか発表させる。 (発信・伝達力) ○ 発表を聞くときには、自分の考えと比べながら聞き、必要に応じて自分の意見の修正のために資料を収集する活動にもどらせる。 (創造力⇔判断力)	C - ②、④ D - ④ E - ③ F - ④、⑤ F - ③ 考えの修正 E - ④
終末 (5分)	7 戦争はどのように終わったのかまとめる。 8 本時のまとめをする。 9 次時の予告をする。	○ 話し合いで出てきた言葉をもとに、まとめをノートに書かせる。 ○ 沖縄戦・原爆の投下についてまとめたことを振り返らせる。 ○ 次時は、15年の戦争の歴史をまとめることを知らせる。	

オ 考察

(ア) 活動①について

教科書や資料集、インターネットの資料の中から戦争がどのように終わったのかを調べるための資料を選び、ノートにまとめる際のキーワードとなる言葉を発表させた。これにより、児童は、多くの資料の中から沖縄戦と原爆の



「活動①の様子」

投下それぞれの出来事をまとめるための資料を選び、使う資料に印をつけることができた。
また、ノートにまとめる際のキーワードを資料から見つけることができた。

(イ) 活動②について

どのように戦争が終わったのか資料から事実を書き抜き、その事実をもとに「分かったこと」、「予想できること」、「思ったこと」などの自分の考えをノートにまとめ、話し合わせた。ここでは、自分の考えの書き方のモデルを示すことにより、ほぼ全員が自分の意見を書くことができた。中には、2つ以上の資料を組み合わせ、広島と長崎の原爆の被害について比較したり、資料に書かれてある事実を確かめるために地図を活用したりするなど、地形と原爆の被害の関係を導き出す姿も見られ、情報をよりよく伝達することができた児童もいた。また、自分の考えと友達の考えを比べながら、発表を聞かせることで、資料の書かれている事実を確認したり、考えの修正をしたりする姿も見られた。



(2) 検証授業（中学校）

ア 実施学年・教科および単元名 第1学年 数学科 「4章 変化と対応」

イ 各活動に応じた主な手立て

活動	手 立 て
活動①	集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すために、「同じ意味をあらわすものや、異なる面積になっているものがないか」「縦と横の長さを整数の値だけではなく、小数や分数まで広げられないか」等を教師側から投げかけ、生徒に確認をさせる。(収集力⇔判断力)
活動②	式や表、グラフに表わす上で、気づいたことをよりわかりやすく説明するために、活動①「長方形をかく段階」に戻って、必要な情報を見つけ出させる。(表現力⇔判断力)

ウ 本時の目標

- 反比例、比例定数の意味を十分に理解している。(数量や図形などについての知識・理解)

エ 学習指導過程

段階	主な学習内容及び学習活動	指導上の留意点	情報活用の実践力 段階表との関連
導入 (15分)	1 本時の学習課題を確認する。 同じ面積の長方形を調べてみよう。		
	2 班で、長方形の面積を決める。	○ 多様な面積を比較するために、いくつかの面積(6、8、10、12、14、16)から決めさせる。	
	3 個人で、同じ面積の長方形をできるだけ多くかく。	○ 進んで情報を集め、調べるために、長方形をいろいろかかせる。	
	4 班で、かいた長方形を集め、情報を確認する。	◎ 同じ意味をあらわすものや、異なる面積になっているものがないか、確認をさせる。(収集力⇔判断力)	振り返り A - ②
	5 班で、気づいたことをまとめ、全体に発表する。	○ 反比例の特徴について考えるために、各班の意見の共通点をおさえる。	

活動② 情報を整理し、考えや意見を発信・伝達する活動		考えの修正
展 開 (25 分)	<p>6 様々な情報を、表、式、グラフの視点から、反比例の特徴について考える。</p> <p>横の長さを x cm、縦の長さを y cm として、 表を作成する。(表)</p> <p>○ x の値を 2 倍、3 倍、4 倍、…すると、 y の値は $\frac{1}{2}$ 倍、$\frac{1}{3}$ 倍、$\frac{1}{4}$ 倍、…となる。</p> <p>反比例、比例定数の意味について考える。 (式)</p> <p>○ 対応する x と y の値の積 xy は一定で、比例定数 a に等しい。つまり、x と y の関係は $xy = a$ とも表す。</p> <p>グラフを作成する。(グラフ)</p> <p>○ (双) 曲線である。</p>	
終 末 (10 分)	<p>7 個人の意見をすべて揭示し、数学的用語を用いながら、処理の仕方グループ分けをする。</p> <p>・反比例 ・反比例の特徴</p>	<p>○ 学習の定着を図るために、本時の内容をまとめさせる。</p> <p>○ 次時の新たな課題の解決のために、表、式、グラフという方法についてまとめさせる。</p>

オ 考察

(ア) 活動①について

集めた情報が正しいか見極め、必要な情報を見つけ出すために、「同じ意味をあらわすものや、異なる面積になっているものがないか」「縦と横の長さを整数の値だけではなく、小数や分数まで広げられないか」等を教師側から投げかけ、生徒に確認をさせた。これにより、自ら作図した同じ面積の長方形の情報をもとに、同じ意味をあらわすものや、異なる面積になっているものがないか、グループで話し合うことができた。また、縦と横の長さを整数の値だけではなく、小数や分数まで広げることで、より細かく情報の確認を行うことができた。



「活動①の様子」

(イ) 活動②について

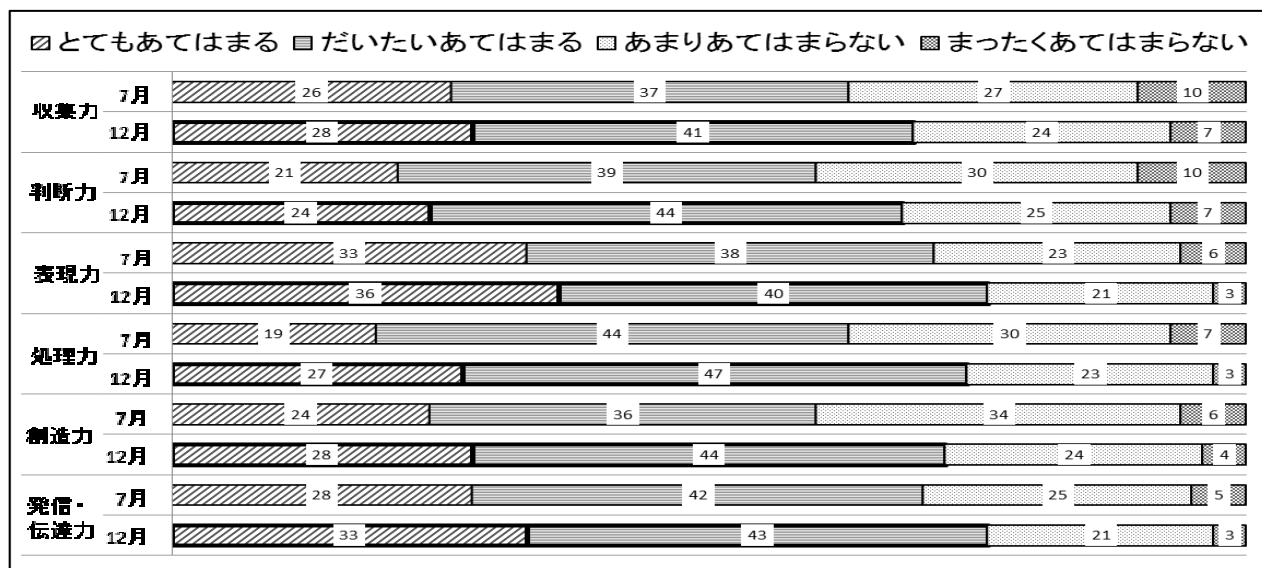
式や表、グラフに表わす上で、気づいたことをよりわかりやすく説明するために、活動①「長方形をかく段階」に戻って、必要な情報を見つけ出す場を設定した。これにより、現段階で分かっている縦と横の関係を分かりやすく、式や表、グラフにまとめていた。また、それぞれまとめるときに、気づいたことをよりわかりやすく説明するために、活動①に戻り、新しい同じ面積の長方形を作図して、情報を新たに見出すことができていた。



「活動②の様子」

4 児童生徒の変容

7月と12月の意識調査の結果【図6】を比較すると、6つの能力全てにおいて肯定的な回答をする児童生徒が増えてきている。特に課題であった「判断力」については肯定的な回答が60%から68%、「創造力」については肯定的な回答が60%から72%へ増えている。授業において、段階表のそれぞれの能力を意識しながら指導に当たったこと、活動モデルを活用し、各能力のつながりを意識して指導したことが効果的であったのではないかと考える。



【図6】7月と12月のアンケート結果の比較

VII 成果と課題

1 研究の成果

- 段階表や活動モデルを見直し、学習指導過程に位置付け、学習活動に応じた手立てを講じたことで、活動状況をより正確に把握でき、「情報活用の実践力」を育成することができた。
- 他教科でも授業を実践したことにより、いろいろな場面で段階表や活動モデルが活用できること、また、各教科、領域を関連付けて活動モデルを活用した授業を進めていくことで、より「情報活用の実践力」を高められることが明確になった。

2 今後の課題

- 今後、6つの能力の中でどのような項目を苦手としているのか、さらに細かく分析していく必要がある。
- 段階表や活動モデルについて、教科や単元の特性に応じて適切に活用していく研究を図っていく必要がある。

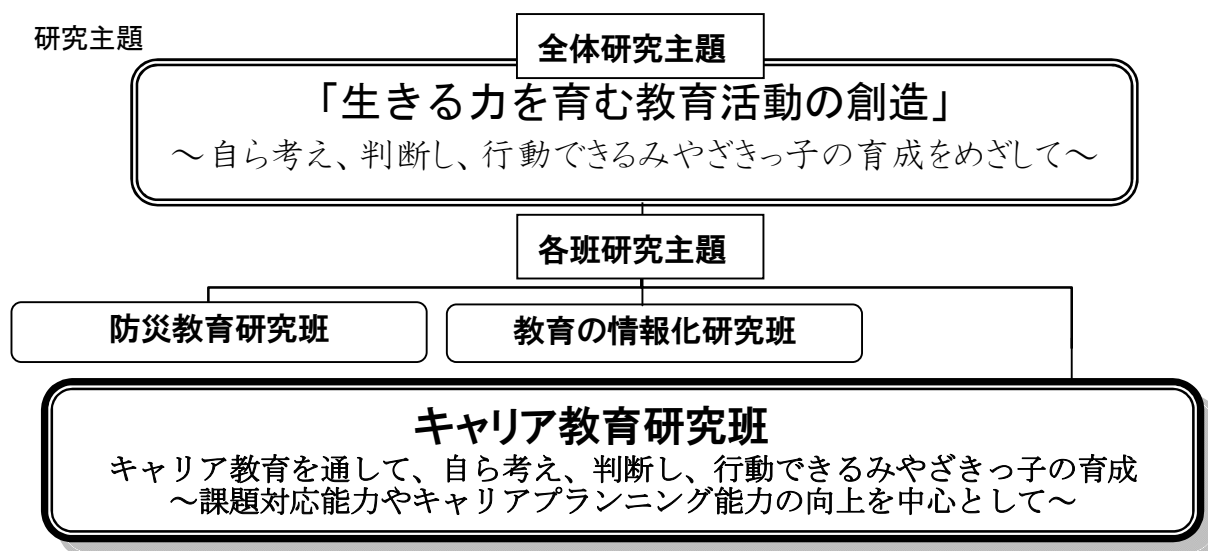
<引用・参考文献>

「小学校学習指導要領」解説 理科編 文部科学省
 「中学校学習指導要領」解説 理科編 文部科学省
 「教育の情報化に関する手引き」 文部科学省
 「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」 文部科学省
 1) 「情報活用の実践力尺度の作成と信頼性及び妥当性の検討」
 (1999 日本心理学第63回大会発表論文集 高比良ら)
 2) 「中学生の『情報活用の実践力』における構造モデルの検討」
 (2008 日本教育工学会論文誌 市原ら)

<研究同人>

所長	有村 政美	
指導主事	酒井 昭弘	
研究員	山元 朋彦 (宮崎市立小戸小学校)	清武 修二 (宮崎市立加納中学校)
	後藤 智美 (宮崎市立櫛北小学校)	長野 裕介 (宮崎市立大塚中学校)
	福堂 恵 (宮崎市立西池小学校)	西 隆行 (宮崎市立宮崎西中学校)

I 研究主題



II 主題設定の理由

21世紀の知識基盤社会においては、生きる力を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和のとれた児童生徒の育成が求められている。さらに、教科等を横断して改善すべき事項として、情報教育、キャリア教育、安全教育などがあげられている。

また本市においては、「宮崎で育ち、学ぶことを通して、郷土に誇りと愛着をもつ感性豊かな子どもたちの育成」を「目指すべき姿」として、「宮崎市教育ビジョン」が策定されており、その中で、確かな学力やキャリア教育等の充実が求められている。また、東日本大震災の教訓や日向灘域の地震の活動化を受け、昨年度より市内の小中学校に新たに防災主任を置いた。さらに、本年度、市内すべての小中学校のコンピュータを入れ替え、教育の情報化のさらなる推進に努めているところである。

これらの社会や本市の状況を踏まえ、本研究班においては、昨年度から2か年計画で宮崎市の子どもたちが、自分のよさや可能性などに気付き、自らの将来を考え、自分らしい生き方を実現していこうとする態度を育成するキャリア教育の指導の在り方について研究を進めてきた。

昨年度は、キャリア教育において育成すべき能力である「基礎的・汎用的能力」の4つの能力の中の「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」の2つに焦点を絞って指導計画を立て、研究を進めた。そこでは、教育活動全体におけるキャリア教育の視点を明確にしたシラバスを作成し、視点を体系化した授業の在り方についての研究を行い、人間関係や自己に関する能力が向上するなどの成果が見られた。そこで、本年度は、昨年度の成果を生かしながら、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の2つに焦点を当てた指導計画の作成や授業実践の在り方について研究を行い、キャリア発達の中でもさらに実践に近い能力を育成したいと考える。

このことにより、全体研究主題である『「生きる力を育む教育活動の創造」～自ら考え、判断し、行動できるみやぎっ子の育成をめざして～』に迫ることができるであろうと考え、本主題を設定した。

III 研究目標

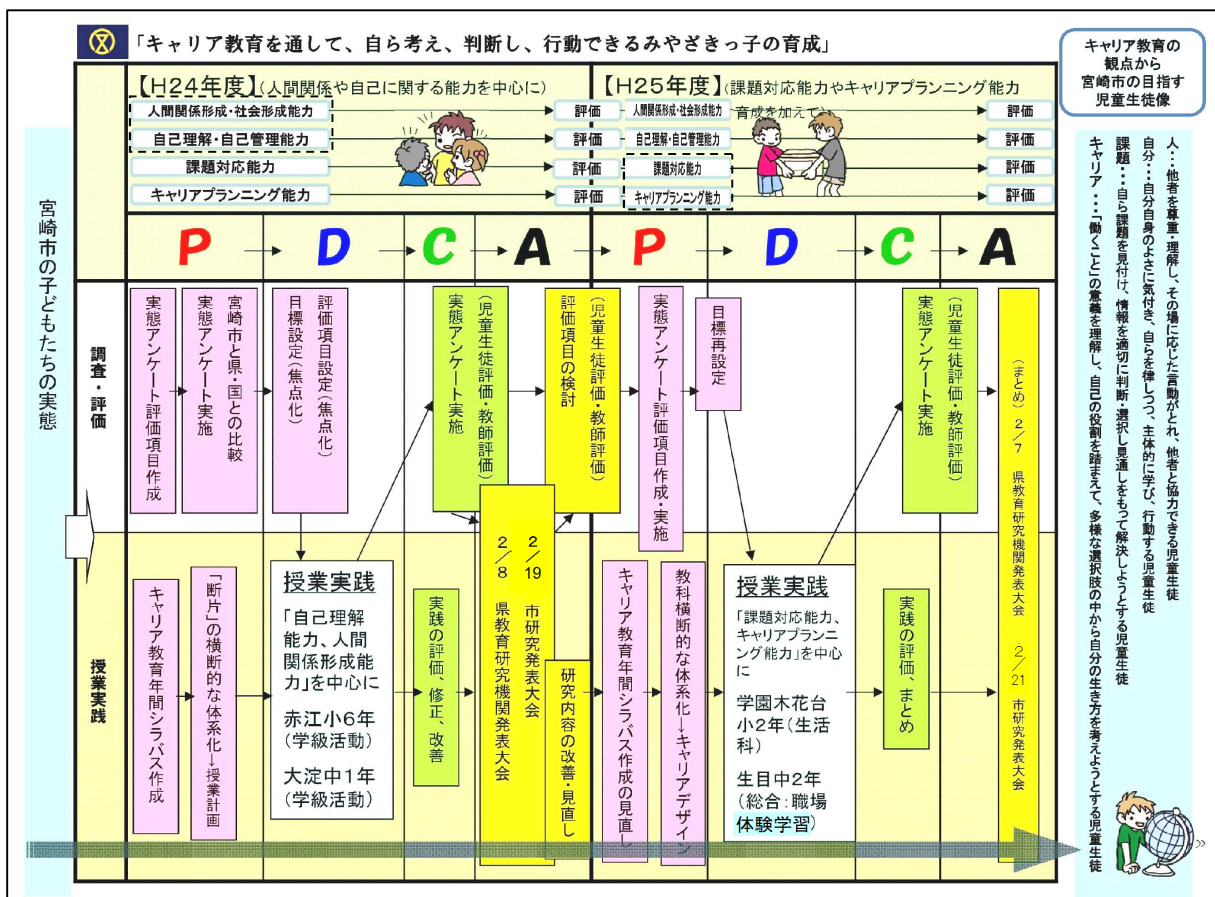
キャリア教育を通して身に付けさせたい「基礎的・汎用的能力」を育成するために、キャリア教育の視点を体系化した指導計画の作成や効果的な人材活用を図った授業について、実践的に究明する。

IV 研究仮説

キャリア教育の視点を明確にした指導計画（「キャリアデザイン」）を作成したり、効果的な人材活用を行った授業を計画・実践したりすれば、「基礎的・汎用的能力」を身に付けた児童生徒を育成することができるであろう。

V 研究構想及び研究計画

本研究の構想及び計画をまとめると、【図1】のようになる。



【図1 研究構想及び研究計画】

VI 研究の実際

1 本研究におけるキャリア教育の捉え方

本研究では、豊かな人間性や学力、体力の日々のレベルアップが、自分の将来の選択肢や可能性を広げ「なりたい自分」へ一歩ずつ近づいていること、高校や大学等に入ることがゴールではなく通過点であり、学び続ける力や働き続ける力をいつまでも身に付けていくこと、などの構想を根底にした教育活動を展開していくことで、子どもたちのキャリア発達を促すことができる。特に本年度は「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力」を育む授業づくりに焦点化し、小学校段階から組織的・系統的に人材を有効に活用しながら体験活動を通じたキャリア教育の在り方について研究を進めていく【図2】。中教審の答申においても、キャリア発達を促す上で「親や教師以外の地域の大人」との交流や「職場体験活動」「他者との直接的な関わり」等の活動を行うことが極めて重要であると記されている〔注1〕。

以上のように本研究ではキャリア教育を捉え、キャリア教育の視点を明らかにした指導の工夫や人材を有効に活用した授業づくりについて研究を進めることとした。



【図2 キャリア教育のイメージ】

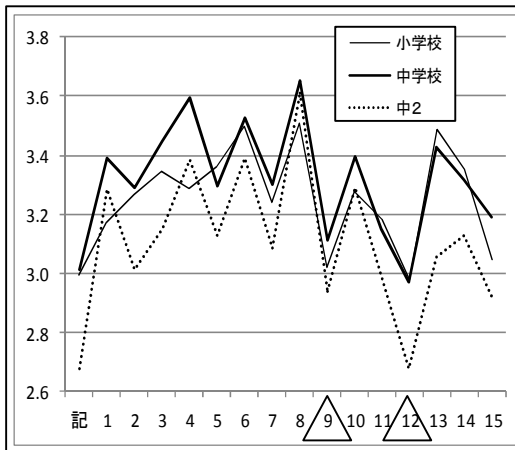
2 児童生徒の実態と目標設定

まず、児童生徒の「基礎的・汎用的能力」に関する実態を把握するために、研究員の所属する学校でアンケート調査を実施した。基本的には昨年度と同じアンケート内容で調査を行ったが、「自分のよいところを3つ以上あげることができますか」と「大人はどうして働くのか」の項目については記述式にし、児童生徒が自分の良いところや働くことについてどのように考えているかを把握できるようにした【表1】。

【表1 アンケート調査項目】 ※対象：小学校2・4・6年 179名、中学校1・2・3年 603名

課題対応能力	9	分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を集めたり、だれかに質問したりしていますか。
	10	同じ失敗をくり返さないために、その後の行動に気をつけていますか。
	11	何かをする時に計画を立てたり、よりよい方法を考えたりしていますか。
キャリアプランニング能力	12	「大人はどうして働くのか」考えたことがありますか。 どうして働くのか書きましょう。()
	13	今、学んでいることが、将来の自分につながっていると思いますか。
	14	学校や学級、家庭や地域の中で、自分の役割がありますか。
	15	自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強のしかたを工夫したりしていますか。

【図3 アンケート調査結果(7月)】



4 いもしている(考えている) 3 時々している(考えている)
2 あまりしていない(考えていない) 1 まったくしていない(考えていない)

【図3】は【表1】のアンケート調査結果から抜粋したものである。児童生徒の評価を見ると、自分から進んで調べる態度(課題対応能力)と「なぜ働くのか」(キャリアプランニング能力)の項目で平均値が3.0前後で、他に比べてできていないと感じている児童生徒が多いことがわかった。特に職場体験学習を実施する中学2年生ではその傾向が強く見られ、3割以上の生徒ができていないと感じている状況にあった。また、「大人はどうして働くのか」の問いには、「お金のため」、「生活していくため」という回答が多く、「社会貢献」や「生きがい」といった答えは少なかった。そこで、アンケートの結果と日常の児童生徒の様子から、【表2】のような「基礎的・汎用的能力」ごとに目指す児童生徒像を再設定した。

【表2 目指す児童生徒像】

基礎的・汎用的能力	目指す児童生徒像 (H25年度 下線部を追加)
人間関係形成・社会形成能力	他者を尊重・理解し、その場に応じた言動がとれ、他者と協力できる児童生徒
自己理解・自己管理能力	自分自身のよさに気付き、自らを律しつつ、主体的に学び、行動する児童生徒
課題対応能力	自ら課題を見付け、情報を適切に判断・選択し見通しをもって解決しようとする児童生徒
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自己の役割を踏まえて、多様な選択肢の中から自分の生き方を考えようとする児童生徒

3 「キャリアデザイン」

各学校においてキャリア教育の指導は行われているが、活動が単発であったり、学習したことがその後の日常生活に生かされていないといった現状がある。

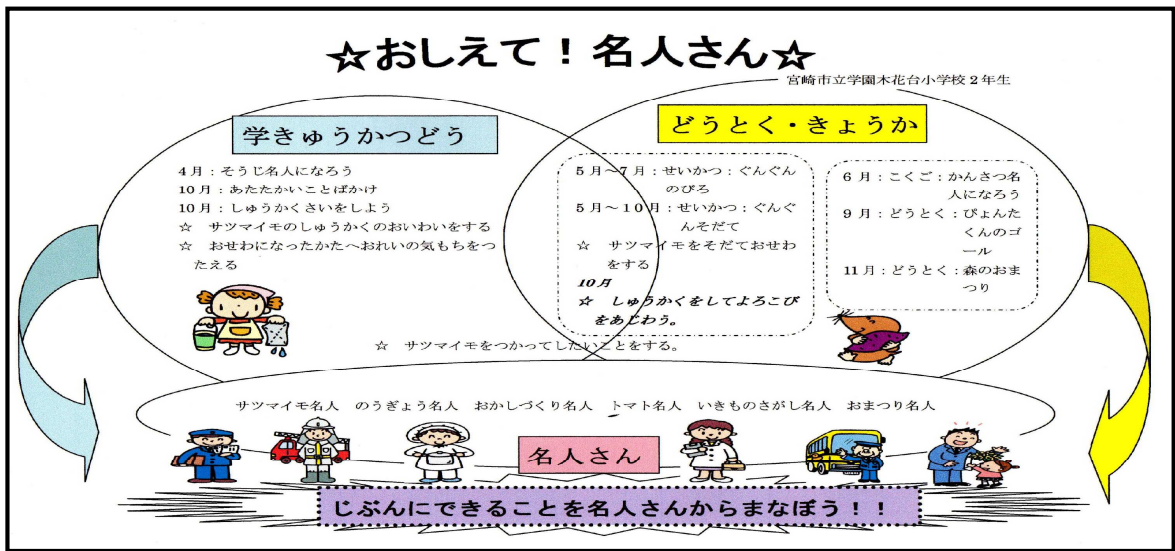
そこで、「特別活動」や「総合的な学習の時間」「道徳」「各教科」「日常生活」といったあらゆる教育活動の中で、教師がキャリア教育の視点を明確にし、各々の教育活動を関連させて指導していくために、年間指導計画を基にキャリア教育のシラバスを昨年度同様に作成した【図4】。

学園木花台小学校 2年生 H25キャリア教育シラバス				
	4月	5月	6月	
学校行事	始業式 入学式 大清掃	校外学習 不審者避難訓練 Welcome Party 修学教室	プール開き	全校発表
学級活動	かかりを決めよう 2年生になって 本と友達になろう	楽しい学級 そうじ名人になろう	交流会をしよう 手なあいさつ 子どものは	しゅくをしよう
生活科	2年生もみんな かよく、げんきよ く！ レッツゴー！ま たんけん(きあ、 さくせんかいぎ だ)	レッツゴー！ま たんけん(町をた んけんしよう、 なんなひみつが みつかったかな はっけんしたこ をしようかしま す・おれいのきも ちをどけよう)ぐ んぐんのびる	流しをしよう おじさん(おじ さんの物に かかるとい いよきつて どうしたら いいかな)	しゅくをしよう あそびます つまれ！(手作 りのおもちゃ つくり、おも ちゃを作っ てあそぼう なであそぼ う、おもちゃ つくり、おも ちゃをつくら せよう)
道徳	明るくあいさつ (おじさんごん にちほ)注意しよ う(りすのちよ う)きまりを守る (おぼけ学校のま まり)	学校大好き(学 校のうた)温か い心(わけつこ じょう)みんな が使うもの(森 のけいじばん)	周りを守ろう (おじさん の物に かかるとい いよきつて どうしたら いいかな)	しゅくをしよう あそびます つまれ！(手作 りのおもちゃ つくり、おも ちゃを作っ てあそぼう なであそぼ う、おもちゃ つくり、おも ちゃをつくら せよう)
各教科	みんなで話し合いま しょう(算数)		だいじなこ を おとさすに たり聞いた よう(国語)	しゅくをしよう あそびます つまれ！(手作 りのおもちゃ つくり、おも ちゃを作っ てあそぼう なであそぼ う、おもちゃ つくり、おも ちゃをつくら せよう)
日常生活	日直(週直) ①②		係・当番活動①②	

	9月	10月	11月	12月	1月
学校行事	全校朝会 津波・地震避難 訓練	1学期終業式 2学期始業式	就学時健診 校外学習	火災避難訓練 全校朝会 持久走大会	全校朝会 給食感謝週
学級活動	あたたかい言葉かけ しゅくをしよう	くぐんぐんのびる (サツマイモの 調理・そだ てあそぼう なであそぼ う、おもちゃ つくり、おも ちゃをつくら せよう)	もつと知りたい 町のこと(秋の はどうなっ ているよ、い いはなね、見 つけたね)	冬休みの過 し方 けがの手当 て	なかなよし 食ありがと
生活科	あそびます つまれ！(手作 りのおもちゃ つくり、おも ちゃを作っ てあそぼう なであそぼ う、おもちゃ つくり、おも ちゃをつくら せよう)	くぐんぐんのびる (サツマイモの 調理・そだ てあそぼう なであそぼ う、おもちゃ つくり、おも ちゃをつくら せよう)	もつと知りたい 町のこと(秋の はどうなっ ているよ、い いはなね、見 つけたね)	冬休みの過 し方 けがの手当 て	なかなよし 食ありがと
道徳	整理整頓 かたがた かけがえない 命(ふしぎな音 な)い言葉(お おぼえ)	かたがた かけがえない 命(ふしぎな音 な)い言葉(お おぼえ)	もつと知りたい 町のこと(秋の はどうなっ ているよ、い いはなね、見 つけたね)	冬休みの過 し方 けがの手当 て	なかなよし 食ありがと
各教科	やりぬく心(びよんた んのゴール)	かたがた かけがえない 命(ふしぎな音 な)い言葉(お おぼえ)	もつと知りたい 町のこと(秋の はどうなっ ているよ、い いはなね、見 つけたね)	冬休みの過 し方 けがの手当 て	なかなよし 食ありがと
日常生活	係・清掃指導①②	休み時間の集団の中での人間関係①			

【図4 シラバス学園木花台小2年生】

また、学習したことを、今後どの場面で生かすことができるのか等の見通しがもてるようにするために、キャリア教育のシラバスから、身に付けさせたい能力を絞り込んで重点的に指導するための「キャリアデザイン」を作成した【図5】。



【図5 学園木花台小2年生用キャリアデザイン】

今の学習活動が、過去や未来の学習活動とどうつながっているのかを児童生徒に常に意識させながら指導することが大切である。そのつながりを意識させ、他教科・他領域との関連について一目でわかるようにしたものがこの「キャリアデザイン」である。

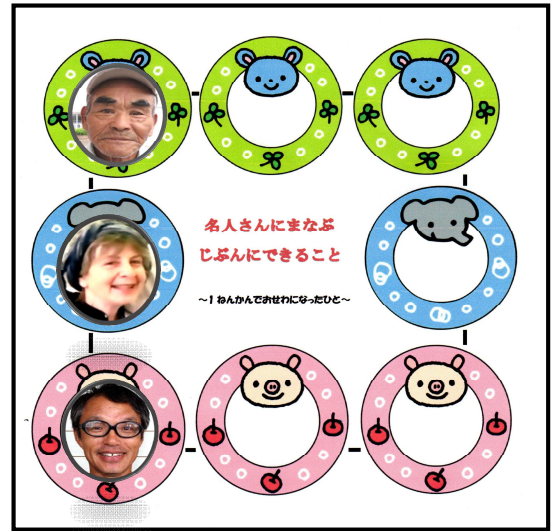
さらに、本年度は「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を身に付けさせるための人材活用の在り方についても検証を行った。

小学校での検証では、人材を「名人さん」とし、児童がかかわりをもった「名人さん」の写真を「キャリアデザイン」の裏面に貼ることができるようなシート（名人さんシート）を作った。

「名人さん」からの学びを再確認し、深めることをねらって振り返りの際にシールプリントになっている「名人さん」の写真を貼る活動を行った。

また、自分達の課題解決には「名人さん」の力が大きく関わっていることに気付かせることにもつなげた。

さらに、このシートの活用は、自分でできることが「名人さん」一人一人とのかかわりにおいて、一つ一つ増えていったことへの喜びと「名人さん」への畏敬の念を抱かせることもねらいとしている【図6】。



【図6 名人さんシート】

中学校での検証では、「総合的な学習の時間」の職場体験学習の37時間の指導計画をすごろくの形にした「キャリアすごろく」を作成し、生徒が社会人・職業人として生活していくために必要なことを段階を踏んで考え、身に付けられるようにした。この「キャリアすごろく」は、自らの学びの段階を「見える化」することで、それぞれの活動が単発で終わるのではなく、つながっていることを生徒に意識させ、将来の自分のあるべき姿について見通しをもたせることもねらいとしている【図7】。

④ 事業所決定。 ・ 班長決め ・ 交通手段の確認 ～自分の役割やすべきことを考える～	⑤ 自己紹介カードの作成 ～気持ちを精一杯こめて～	⑥ 事業所の方へのインタビュー内容の作成。 ～私は何を学びたいのか～	⑦ 事業所への電話の練習。 ～練習して、社会人の土台づくり～	⑧ 事業所への電話連絡。 ・ 事業所と連絡を取り、挨拶および仕事内容の打ち合わせをする。～誠意を見せる～
③ 事業所希望アンケートを書く。 ～私は、どこで何を学びたいのか～	② 「職業や産業」について学ぶ。 ～職業とは・・・～	① 働く意義や「職業」と「適性」について学ぶ。 ～なぜ、人は働くのか～	⑨ しおり原稿の作成。 ～職場体験への自覚と準備～	⑩ 「職場体験の目的とマナー」について ～何を自分のもてるのか～
<p>青：とてもよくできた 黄：ふつう 赤：もうすこし</p>		<p>① 働く意義や「職業」と「適性」について学ぶ。 ～なぜ、人は働くのか～</p>		
<p>STAP 働く社会人への道 Road of the professional</p>		<p>⑪ あいさつや挨拶の練習ができるように練習する。</p>	⑫ 職場体験 事業所名【 ～働く大人の姿に学ぶ～	
<p>自分の知識・技能にする～</p>		⑬ 職場体験活動を終えたの学習。 ～学んだことをさらに深める～	⑭ お礼の手紙を書く。 ・ 丁寧さと清潔 ～精一杯の感謝の気持ちを込めて～	
<p>2年 組 番 氏名</p>				

【図7 キャリアすごろく】

4 キャリア教育の視点を踏まえた授業づくり

(1) 「人材活用」について

「キャリア教育の手引き(中学校)」には、「職業人から話を聞いたり、職場で体験活動をしたりすることは、子どもたちの知的好奇心を醸成し、学習意欲を高めることにつながり、事業所は社会と一緒に味わう事のできる1つの教室であり、働く人々は先生であり、その場で実際に体験する様々な出来事は教材になる」と述べられている〔注2〕。このことから、児童生徒は授業の中で職業人との活動を行うことによって、自分たちの普段の生活と職業との関係を考え、職業に対する基礎的な知識・理解を得ることができる。児童生徒が仕事をしている人とかかわり、活動することで、仕事に必要な資質や能力などを知る機会となり、キャリア発達を促す上でも意義深いと考え、授業における人材の活用について、検証することとした。

(2) 授業の実際 (小学校編)

学園木花台小学校第2学年 生活科『サツマイモでおいおいしよう』

(ア) 授業のねらい及びポイント

本学級の児童は、キャリア教育アンケート結果から、「学習課題を進んで解決していこうとする意欲」や「働くことや働いている人」への興味・関心が低いことが分かった。そこで、本単元では以下の3つの手立てを講じ、検証することとした。


まず、人材として地域の職業人の活用を行った。サツマイモを使った料理(お菓子)の作り方を教えてもらう菓子職人を「お菓子作り名人さん」として、授業の中で活用を図った。

次に、授業の中で児童が職業人の仕事をしている姿を具体的に理解できるように「名人さん」との体験活動の場を設定した。活動の中で聞きたいことがある時は「名人さん」に直接教えてもらったり質問したりすることを事前に指導しておき、課題を自力で解決できるようにした。

さらに、単元の終わりにおいては、「名人さんシート」にシールを貼る活動を行った。シートにシールを貼りながら、「名人さん」との活動を通して学んだことを振り返らせ、働くことや働いている人への仕事への興味・関心を高めていく場面を設定した。

(イ) 学習指導過程

階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点 ☆児童の様子	資料・準備
つかむ5分	<p>1 これまでの学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ サツマイモを使ってしたいこと ○ 収穫祭の計画 <p>2 学習のめあてを確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>名人さんに教えてもらって、おかしを作ろう。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童の願いである「サツマイモを使ってしたいこと」や「収穫祭での計画内容」を確認し、学習のめあてを明確にもたせる。 ○ 分からないことは質問すること、名人さんの作り方を見てから活動することを確認し、学習内容を意識付けるようにする。 <p>☆ 前時の学習を振り返ったり、パティシエの紹介を見て、本時の学習のめあてを明確にもつことができた。</p>	カード
考え75分	<p>3 名人さんの話を聞く。</p>  <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>お菓子を作る前には、身支度を整える、手洗い、材料を正確に計るなど、大切なことをたくさんするんです。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 菓子職人の作ったお菓子を見たり、お菓子作りで大切なことについての話を聞いたりすることを通して、自分たちの知らないことを教えてくださる名人さんの仕事に興味・関心をもつことができるようにする。 <p>【キャリアプランニング能力】</p> <p>☆ 作るだけでなく、作る前の準備(衛生面・安全面等)についての話を聞き、職人は、食べてもらう人の事を考えていることを実感することができた。</p>	名前カード パナイエット(実物) 仕事場の写真
考え75分	<p>4 名人さんと一緒にパナイエットを作る。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 材料の確認 (2) 作り方の手順 (3) 作る (4) 試食をする <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>みんなに食べてもらうものだから、手をしっかりあらおう。</p> </div> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>あたたかいうちに混ぜた方が、砂糖がよく溶けて混ぜやすいですよ。</p> </div> <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>混ぜ方は、このぐらいでいいですか？</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 名人さんの作業を見てから活動させ、名人の仕事を目の前で見ることで、名人の仕事の技の素晴らしさに触れさせる。  <div style="border: 1px solid orange; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>材料を量るときには、計算、混ぜるのには力がないといけません。料理には、いろんな力が必要なのですよ。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 作業の際に、困ったことがあった時には、名人に質問して自分で解決していくことができる力を身に付けさせる。 <p>【課題対応能力】</p> <p>☆ 困ったことがあったら名人に質問することを確認しておいたので、児童は、積極的に質問をして課題を解決しようとしていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 名人さんには、調理と片付けを並行して行ってもらい、計画的に仕事を進める大切さについて気付かせる。 <p>☆ 作り終わったら片付けをすることで、仕事を計画的に進めることの大切さを学び、児童も進んで片付けをしようとしていた。</p>	エプロン マスク 三角巾 サツマイモ 砂糖・卵 松の実・オーブン・へら・ボール・マッシャー・グラシン紙・ナプキン

ま と め る 10 分	5 学習をまとめる。 <input type="radio"/> お菓子を作ったこと <input type="radio"/> 名人さんに教えてもらったこと  <p>おいしくできて、よかった。</p> <p>家族にも作ってあげたいな。</p>	<input type="radio"/> 教えてもらって思ったことの視点を、「お菓子を作って思ったこと」と「名人さんに教えてもらったこと」の2つに絞り、できた喜びを自覚させたり、働くことについてまとめたりして、仕事への興味・関心を高める。 <input type="radio"/> 教えていただいたお菓子作りの活動について振り返らせ、心をこめてあいさつをさせる。 ☆ 「作れるようになってよかった」「名人さんの仕事が分かってよかった」等、感想を進んで発表していた。	
	6 あいさつをする。 <input type="radio"/> お礼の言葉		

(7) 児童の感想

「作れなかったお菓子を作ることができるようになってよかったです。」「パティシエの仕事が分かってよかったです。」「お菓子の作り方が分かったので、家族に作ってあげたいです。」「お菓子を作ることができたのは、名人さんのおかげです。」「野菜作り名人さんとのパーティで、このお菓子を作ったら『おいしい』と喜んでもらえてうれしかったです。」

(8) 考察

本単元では、これまでお菓子作りの協力を保護者に依頼していた。しかし、本時は保護者以外の「職業人（パティシエ）」を人材として活用することで、保護者からは学ぶことができない職業人としての厳しさや、その裏側にある「食べてもらう人のため」という思いを、説明を加えたり作業を通したりしながら具体的に体験させ、気付かせることができた。また、分からないことがあったら担任教師ではなく「名人さん」に質問することや教えてもらうことを事前に確認したことで、児童は困ったことがあったら「名人さん」に自ら質問し課題を解決していた。さらに、活動後「名人さんシート」の作業を行うことで、「名人さん」から教えてもらったことを思い出し、「名人さん」から学んだことを振り返ることができた。「名人さん」のシールが増えていくことで、児童は「次は、どんな『名人さん』との出会いがあるのだろう」と、新たな人材への期待感も高めていくことができた。

(3) 授業の実際（中学校編）

生目中学校第2学年 総合的な学習の時間『職場体験活動に必要なあいさつや社会的マナーを確認しよう』

(ア) 授業のねらい及びポイント



本学級の生徒は、キャリア教育アンケートの結果を見ると、あいさつやマナーについて、自分ではできている方だと答えた者が多い。しかし、職場体験活動を控える中で、「一人で」「慣れない場所で」「知らない人に」という場面で、あいさつや適切な言動ができるかといえはまだまだ不十分であり、練習の場が必要であると考え、以下の3つの手立てを講じ、検証することとした。

まず、人材活用として職業人による授業を行った。事前学習で企業経営者の方にあいさつや社会的マナーについての講話をいただき、その時の様子をビデオで撮影しておいた。そして、社会人の目線でのあいさつやマナーの大切さを生徒に再度考えさせるために、本時の導入でその時のビデオを見せて振り返りや意欲付けを図った。

次に、実践に近い場面を設定して疑似体験を行うことにした。本学級の生徒は、あいさつや社会的マナーが重要なことは理解しているが、実際にできるかどうかが課題である。教師を職場の方やお客さんと想定して様々な場面を設定し、緊張感がある中で実践できるかを体験させることで、自分の実践力を把握させたいと考えた。

さらに、自分の学びを「見える化」した「キャリアすごろく」を活用させることで、生徒に自己評価をさせながら段階的に自分のキャリア発達を認識させることができると考えた。

(イ) 学習指導過程

段落	学習内容及び学習活動	指導上の留意点 ☆生徒の様子	資料・準備
導入 10分	1 アンケート①②で自分達の意識を確認する。 2 「あいさつ」について、先週の講話をビデオで振り返る。 3 本時の目標 より質の高い「あいさつやマナー」について考えてみよう。	○ 自分達の「あいさつ」についての認識を振り返らせる。 ☆ 「あいさつ」についてのビデオを見て、大切さを再認識した。	・アンケート① (キャリア教育結果)【資料②】 ・アンケート② (道徳結果)【資料③】
展開 30分	4 「マナー」についてのビデオを見る。 ・「マナー」について知る。 5 自分達が行く職場では、「あいさつやマナー」について、重要なことは何かを話し合う。 ・誰に対しての「あいさつやマナー」なのか考える。  この会社だと、どんなあいさつが重要な？自動車の販売や修理をする会社だしなあ…。 6 疑似体験をする。 ・相手をたててあいさつ等を実践する。  生目中〇〇です。3日間、消防隊員として頑張ります。よろしくお願いします!!	○ 事前に同業者同士の席にしておき、グループで話し合わせる。 【課題対応能力】 ☆ どんなあいさつやマナーがあるのかを互いによく話し合っていた。 ○ 重要だと思えることをホワイトボードにまとめさせ、黒板に張らせ発表させる。 ○ 教師を「職場の方・お客さん」と想定し、積極的に練習をさせる。 【キャリアプランニング能力】 ☆ 緊張しながらも、場面にあったあいさつを自分なりに考え、意欲的に取り組んだ。	・ワークシート ・ホワイトボード
終末 10分	7 本時の学習を振り返り、感想やこれから頑張っていこうと思ったことを書く。 「あいさつや社会的マナー」は、誰もが必要と感ずるもの。「時」と「場」に応じた使い分けが必要である。 「あいさつや社会的マナー」は、しっかり身に付けた方がよい。など 8 次時の予告を聞く。	○ 職場体験の日まで残りあとわずかになった今、学校生活の中で意識や行動の変化がなければ、当日も実践することができないことを伝え、意識を高くもたせる。 ☆ 実践してみると、思うようにできないものだという事を知り、ふだんからもっと意識しないといけないという意欲が出てきた。 ○ ワークシートを職場体験前日に、再度振り返るように伝える。	・ワークシート

(ウ) 生徒の感想

「今日の授業で、どのようにすれば今までよりも良いあいさつができるかということを知ることができた。職場体験活動では、敬語や笑顔でハキハキとあいさつをすることを心がけていきたい。」「あいさつが、いつも同じではないということを知った。幼稚園に行くが、先生・園児・保護者など、そのときの相手によって、しっかりと目線を合わせてあいさつをしようと思った。」「職場だけでなく、日常のあいさつから、時や場を考えていきたいと思った。」

(エ) 考察

プロの人材の活用は、生徒に職業人として求められる資質や仕事の厳しさについて学ばせる良い機会となった。また、疑似体験は、その場その時の対応が求められるものであり、生徒たちにあいさつやマナーへの認識の甘さに気付かせることができた。この2つを職場体験活動前に取り組むことは、働くことに対する生徒の意識の向上につながり大変有効であった。

さらに「キャリアすごろく」を通して、生徒が色付けを楽しみながら自己評価をする様子や、喜んで事業者から印鑑をもらう姿も見られ、働くことに対する興味関心を高めることができた。

5 児童生徒の変容

「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成を中心に授業を行った後、【表1】のアンケートを小学校では11月、中学校では12月に再び実施し、児童生徒の変容を調べた。その結果、小学校の学級では、質問9及び質問12、中学校の学級は質問12の項目のポイントが上がった【図8】。組織的・系統的に人材や「キャリアデザイン」を活用し、授業実践を行ったことがポイントの上昇につながったと考えられる。ただ、中学校の学級では質問9の項目のポイントが下がった。自ら調べるといふ自己の姿を意識して見つめ直す機会が増えたことで、生徒の自己評価が厳しくなってきたことも原因ではないかと考えられる【図8】。

また、質問12の記述式「どうして働くのかかきましょう」の項目で7月のアンケートではあまり書けなかった児童が11月のアンケートでは以下のように答えている。

【回答】家族・自分たち・お客様のため。

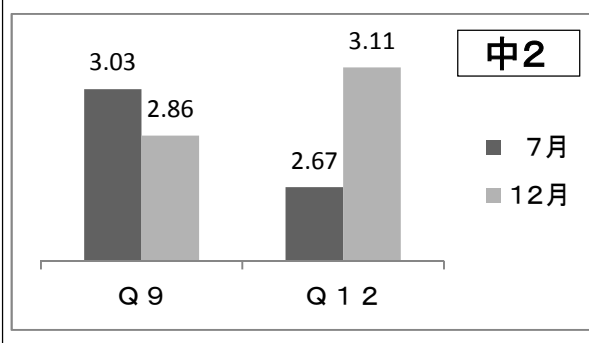
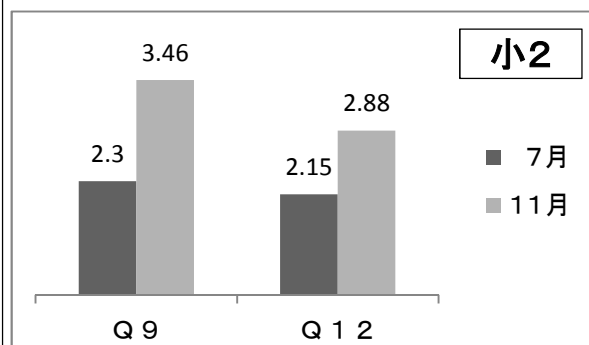
【理由】「名人さんと一緒に勉強して、いろいろな仕事をしている人から話を聞いたり、教えてもらうことができたから」「家族と『この魚はどんなところでだれがとったのかなあ?』『これはだれが作ったんだろうねえ?』等、いろいろな話をするようになったから」

中学校の学級では、7月のアンケートでは「お金のため」「生活していくため」という回答が多かったが、12月のアンケートでは「社会貢献」「生きがい」と答える生徒が増えた。

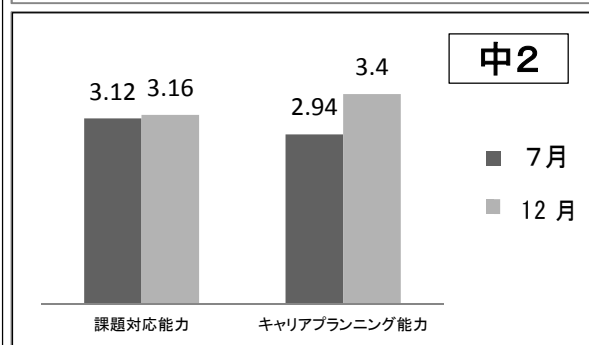
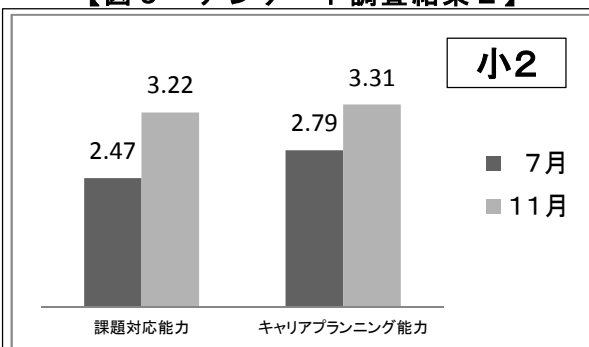
さらに、「課題対応能力」に関する項目（【表1】中の質問9から質問11）と「キャリアプランニング能力」に関する項目（【表1】の質問12から質問15）の平均値をみると、小・中学校ともにポイントが上がるといふ結果が得られた【図9】。

【図8 アンケート調査結果1】

- Q9 分からないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで情報を集めたり、だれかに質問したりしていますか。
- Q12 「大人はどうして働く」のか考えたことがありますか。



【図9 アンケート調査結果2】



「課題対応能力」(質問9・10・11の平均値)

「キャリアプランニング能力」

(質問12・13・14・15の平均値)

VII 成果と課題

1 研究の成果

本年度は「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力」を育む授業づくりに焦点化し、昨年度の「キャリアデザイン」に人材活用の視点を加え、「キャリアプランニング能力」の育成を意識した生活科や総合的な学習の時間の指導を行った。その結果、事後のアンケートから「分からないことを自ら聞いたり本を調べたりするようになった」「働く意義を考えるようになった」など「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」に関する能力が高まっていることがわかった。「大人はどうして働くのか」を述べる内容についても、「社会貢献」や「生きがい」などの記述が増えた。

また、児童生徒の様子や感想を見ても、友達のよさに気付いたり、感謝の気持ちを忘れないようにしたりする意識の向上がうかがえた。つまり「課題対応」や「キャリアプランニング」についての能力を高める手立てを継続的に行ってきたことで、児童生徒が他者のよさに気づき、お世話になった方への感謝の気持ちをもつこともできるようになったと言えるのではないかと。

さらに、教師がキャリア教育の視点をもって、日常の指導や授業等を体系的に行うことにより、児童生徒、教師共に学習活動の見通しをもてるようになり、キャリア教育に対する意識が高まった。

このことから、本研究がねらった小中学校におけるキャリア教育が目指す能力の基盤づくりという点では、「基礎的・汎用的能力」を身に付けた児童生徒の育成が図られたと言える。

2 研究の課題

今後、人材を活用したキャリア教育をさらに効果的に進めるために、人材を活用した授業を行うための打ち合わせの在り方や、人材の整備及び地域コーディネーターとの連携など、いわゆる「横」の連携についても検討していくことが重要である。

また、今後、宮崎市の子どもたちのキャリア発達を促すために、本研究の取組を市内の小中学校に積極的に広げていきたい。

引用・参考文献

「キャリア教育のススメ」(国立教育政策研究所 平成22年4月)

「小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉」(文部科学省 平成23年5月)

「キャリア教育を創る」(国立教育政策研究所 平成23年11月)

「今ある教育活動を生かしたキャリア教育」(国立教育政策研究所 平成24年8月)

「宮崎県キャリア教育ガイドライン 小・中・高等学校等12年間を見通した宮崎のキャリア教育」(宮崎県教育委員会 平成25年1月)

〔注1〕「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(中央教育審議会 平成23年1月)

〔注2〕「中学校キャリア教育の手引き」(文部科学省 平成23年3月)

研究同人

所長 有村 政美

主幹 日浅 雅道

研究員 日野 浩二 (宮崎市立住吉小学校)

岡本 圭司 (宮崎市立生目中学校)

濱崎 かおり (宮崎市立江平小学校)

戎浦 直幸 (宮崎市立本郷中学校)

尾崎 智子 (宮崎市立学園木花台小学校)

北堀 直宏 (宮崎市立清武中学校)